
ゼロの使い魔advance

赤石 ナイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 advance

【Nコード】

N4108Y

【作者名】

赤石 ナイ

【あらすじ】

戦いは終わらない。

いくら血を流そうが、涙を流そうが決して終わらない。
していることも守護者と変わらないのかもしれない。

だが、それでも良かった。

守れるものがひとつでもあるのなら、戦い続けよう。

神堂元の新たな戦いが始まる。

prologue (前書き)

本作品は作者による独自解釈が含まれており、またオリジナル要素も含まれているためお気を付けください。

また、前作である『魔法少女リリカルなのはadvance』のネタバレ要素が多分に含まれているため、お気を付けください。

prologue

元「正義の味方」か…」

イシュタル「帰ってきて早々どうしたんですか？」

世界の外れのこの場所は時間も因果も全てがない。

男は調整を終えたその後、必ずこの場所に戻ってくる。

英霊でいうところの“座”である。

因果から外れ、この輪から逃れる術などはない。

あるとすれば、魂魄ごと全てを消滅されての存在の死のみである。

彼相手にそれが可能なのは、直死の魔眼をもつ彼女、破界と再世のみだ。

元「偽りの正義かと思っていたが、マギ・ステルマギも捨てたものではなかった。何より、収穫があった…」

イシュタル「収穫ですか？」

それがどんなものなのかは、元本人にしか解らない。

しかし、彼が調整を続けていくことに新たな活力となるものだったのは間違いない。

元「…それで、次はどこにいけばいいんだ？」

イシュタル「そうですね…え〜と、次は…あつ、また魔法の世界みたいですよ」

またか…。

まあ、それなら俺も動きやすい。
だが、どんな世界だろうと神秘に対する隠匿は存在するだろう…。
でなければ、危なっかしいしな。

イシュタル「いいえ、どうやら魔法が生活に馴染んでいる世界みたいですよ」

元「……それは、また難儀な世界だ」

イシュタル「難儀…ですか？」

魔法にまで至った俺が言うのもなんだが、神秘なんてものはあまり
好ましいものとは思えない。

出来ないことがあるからこそ、人は一生懸命にもなれるし、生涯を
費やそうとも思える。

魔術師なんかはそうだ。

根源、魔法に至るために一つの家系が数世代に渡って、神秘を探求
する。

それこそ、自らの人生と命の全てをにかけてだ。

しかし、魔法が一般化してるとなると話は変わる。

魔術師ではなく、魔術使いとして魔法を使っているのだろう。

別段、神秘を手段として用いることがダメだというわけではない。

しかし、俺がこれからいく世界が魔法に依存しているのであれば、
人が人らしく生きていくことへの障害にしかない。

元「…まあ、俺が気にしてもどうにもならんな。 現物 セカイ
を見たわけでもないし、これからだな」

イシュタル「？」

管理者はよくわからないと首を可愛らしく傾げる。
妹の容姿をしている分、何だか嫌だ。

元「…はあ、それで制限はどんなものなんだ？」

イシュタル「ナシです」

なし？

イシュタル「英霊も二人までなら、連れていっても良いそうですよ」
さらには英霊を二人もだと？

元「ちょっと待て。 どういうことだ!？」

“魔法”も“魔術”の制限もない。
宝具の制限もない。

加えて、英霊も連れていっていい…それも二人だと!？

イシュタル「どうやら、世界の…抑止の影響がかなり小さいみたいですよ。 あちらの管理者曰く、その世界は並行異世界ではなく、完全な異世界のようですから」

それなら理解できる。

起源が違うのならば、世界からの抑止も限りなくゼロに近い。
だが、流石にアラヤは存在するようだ。
でなければ、英霊など連れていけるわけもないか…。

元「話は変わるんだが…」

イシュタル「なんでしよう…」

????「クイ？」

こいつはなんだ…？

小さい竜だ。

薄い水色の体に白の腹部：30cm程度の体長に可愛らしく首を傾げるその姿は万人の心を盗むだろう。

この場所に戻ってきて最初に目に入ったのはイシュタルではなく、こいつだった。

しかし、管理者たるイシュタル以外は居ないはずである。

なんで、視界にいれないように頑張っていたが、限界だった。

元「こいつは何だ？」

イシュタル「気づいたら、居たんですよ…本当ですよ」

元「ふん…」

指でその小さな竜をつついてみる。

竜の割には皮膚は柔らかい。

なんだか、ぷにぷにしている。

????「な、なにをするの」

元・イシュタル「…はい？」

????「突つつくのをやめて欲しいの…」

元「喋った？」

イシユタル「喋りましたよね？」

????「竜が喋ったらいけないの？」

普通は喋りませんよ？

数百年を生きた神龍などは確かに喋っても可笑しくはないが…。

元「君：名前は？」

????「名前なの？ ミルっていうの」

元「性別は？」

ミル「女の子なの」

元「どうやって、ここに来たんだ？」

ミル「森を抜けると異世界だったの」

川端康成！？

なぜ、トンネルを抜けるとなんだ！？

元「それで、気づいたらここにいたんだな？」

ミル「そうなの、お姉ちゃんはどこなの？」

元「お姉ちゃん？」

ミル「そうなの…イルククウお姉ちゃんなの」

イシュタルはこの子竜がどこから来たのか先程から調べているようだ。

その間、俺は子守というわけだな…。確かに俺は傭兵として…といつかなんでも屋として子守もしたことがある—（黒歴史）。

しかし、まさか竜の子守をするとは思わなかった。

元「今、あそこのお姉ちゃんが調べているから、もう少し待っててくれな？」

ミル「クイ…わかったの」

子供とはいえ、30歳だ。

流石に少しは聞き分けが良い。

しかし、本当にどこから来たんだろうか…。

イシュタル「元さん！ わかりましたよ！」

元「そうか…それでどこから来んだ？」

イシュタル「元さんがこれからいく世界から来たみたいですよ」

それは好都合…なのか？

なんだか、作威的なものを感じる。

イシュタル「まあ、問題も解決が見えましたし、景気良く英霊の皆さんを呼んでみましょう！」

元「…：良かったな、もう少しで家に帰れるぞ」

ミル「クイ〜！ ありがとうなの」

無駄にテンションの高いイシュタルを無視して、小さな竜に話しかける。

嬉しそうに喉を鳴らし？ ながら、喜ぶ子竜と俺に無視され、管理者は既に涙目である。

鬱陶しいのでスルーだ。

元「さて、英霊を呼ぶとするか…イシュタル準備はいいな？」

イシュタル「うう…：酷いです…：少しでも、元気にいこうかと…：思ったのに」

元「はあ…：わかったから。早く、英霊を呼んでくれ」

イシュタル「…：ああああ！ もう、わかりましたよ！ それで誰を呼ぶんですか！？」

所謂、逆ギレというやつだ。

いや、俺が悪いのかもしれないが元はといえば、こいつがウザイのが原因だ。

少し落ち着けよ…ミルが怯えてるだろ。

子竜は俺の後ろに隠れるようにしてプルプルしながら怯えている。

元「それじゃあ、アルトリアとクー・フリーンを呼んでくれ」

イシュタル「了解です…それではいきすよ」

彼女が前に手を掲げると、そこは眩いまでの光に包まれた。

座へのアクセスは上手くいくだろうか…。

いくら向こうの世界の規制が緩いとはいえ、根源からの規制は変わることはない。

必要以上の負担をかければ、世界は拒否する。

特にギルガメッシュとヘラク罗斯を呼ぼうものなら、確実に座からシャットアウトされる。

イシュタル「来ました…」

ミル「（大いなる意思を感じるの！）」

眩いまでの光の中から現れた人影は二つ…。
そのモノは…。

ランサー「サーヴァント・ランサー…召喚に従い参上した。

これより、我が身・我が槍は御身が下に在り。

我が名と我が誇りに懸けてここに誓約する」

アーチャー「アー「ダウト」なに！？」

現れたのはクー・フリーンとエミヤだった。

なんでかなあ…。

元「イシュタル…何でアルトリアじゃなくて、エミヤがいるんだ？」

イシュタル「ま、間違えちゃいました…テへ」

無性に殺意が湧いてきた…。

アーチャー「待て！ セイバーと間違えたとはどういう意味だ！？」

元「ああ…そのままの意味だよエミヤ。 この馬鹿が間違えたんだ」

イシュタル「ご、ごめんなさ〜い！」

俺に頭をなんども小突かれ、既に涙目だ。

痛いのか？

痛いだろうさ…小突くとはいえ、結構本気だからな…。

ランサー「なあ…俺はこれでよかったのか？」

元「ああ、クー…君は間違いない。よく来てくれた」

アーチャー「クツ！ 間違いで召喚される身にも…！」

元「いや、本当に悪かった。原因は全部、このバカだから」

イシュタル「うう…」

あまりに小突かれすぎて、彼女の頭は大仏顔負けの状態になっている。

タンコブで頭が倍近くの大きさになっているのは気のせいだとしよう。

イシュタル「うう…本当にすみませんでした…。直ぐに座に「いや、もういい」「ふえ？」

元「このメンツで行こう…バランスは悪くない」

ランサー「いいのか？ ここに来る途中、セイバーに会ったんだが…今にも斬りかかりそうな形相でこつちを睨んでいたんだがよ…」

アーチャー「私など、黒化の勢いで睨まれたんだが…」

…死んだかも。

前といい、その前といい、そして今回といい…あれ？ 詰んだか？

元「ま、まあ…あれだ、なんとかするさ」

ランサー「出来るのか？ 女の嫉妬つてのは、キツイぜ？」

アーチャー「私が言うのもアレだが、セイバーが怒ると…食費3ヵ月分が飛ぶぞ？」

財布で済むのなら…安いもんだ。

いや、財布で済むのか？

元が頭を抱えている足下ではミルが口を半開きで、英霊二人を見ている。

ミル「（精霊様なの！ 凄いの！）」

二人から視線をずらし、元を見る。
顔色が悪い。

ミル「（なんなの？ この人を見てると何だかポカポカするの…）」

なんでだろうか。

ない頭を絞って、考えてみた。

ミル「（まあいいか）」

諦めた。

なんだか、大切な事な気もしたが疲れるからやめた。

ランサー「それで、俺たちはいつ向こうに送られるんだ？」

元「む…そういうば、どうなんだイシユタル？」

イシユタル「向こうの準備が出来たら、合図があるみたいですよ？」

アーチャー「合図が…ところで、その竜はなんなのだ？」

ランサー「俺も気になっていたんだがよ…なんだか随分とお前に懐いてるじゃねえか」

ミルは再び、俺の頭の上に垂れかかるように乗っかっている。

元「この場所に迷い込んで来たらしい。それで、これから向かう先の世界がこいつの故郷なんだそうだ」

ランサー「へえ…そいつは良かったじゃねえか」

クーは俺の頭の上にいるミルの頭をガシガシと乱暴に撫ぜている。それにミルは気持ちよさそうに喉を鳴らしている。頭の上にいるため、表情は見えなかったが恐らく目を細めて気持ちよさそうにしているのだろう。

ミル「あ、あの初めましてなの。 精霊様にお会い出来なんて嬉しいの」

アーチャー「ん？ 君には私たちが何なのかわかるのか？」

ミル「なんとなくだけどわかるの」

アーチャー「ほお…」

それは驚きだ。

英霊は確かに精霊に分類される。

それが一目で解るのか…。

感慨に耽っていると、目の前に銀の鏡のような2m程度のものが現れた。

元「もしかして、次の世界はハルキゲニアか？」

イシユタル「あれ？ 言ってますでしたっけ？」

言ってるねえよ。

ハルキゲニアか…向こうは何年くらいたっているのだろうか。

ランサー「あん？ お前は行ったことがあるのか？」

元「昔にな…向こうが何年経っているかわからんが、これで二度目だな」

アーチャー「ふむ…それならば、ある程度の知識はあるか」

元「まあ、詳しい話は向こうに着いてからでいいだろう…。クー、

エミヤ…それに触れてみる」

言われるがままに、素直に銀の鏡のようなものに触れる二人。あれは使い魔召喚の一種のゲートだ。

ランサー「お、おい元！」

アーチャー「ぬ！？ 抜けん！」

指先で触れたただけなのだが、強烈に引き込まれているようでズブズブと奥に引き込まれていく。

元「まあ…そうなるよな」

ランサー「クソッ！ どうなってやがる！」

アーチャー「これは…召喚か！？」

元「正解だ…結構強引だがな。それじゃあ逝くぞ」

元は二人の背中を押し込めるように奥に叩き込む。

元「それじゃあ、イシュタル…行ってくるぞ。ミルも準備はいいか？」

ミル「クイー！」

イシュタル「はい、行ってらっしゃい元さん」

元もまたゲートに歩を進めていく。

だが、何かを思い出したように彼女に伝言を告げる。

元「アルトリアに言い訳しておいてくれ…」

イシュタル「私に死ねと!？」

そんな彼女の悲鳴にも似た非難は彼に届くことはなかった。

主人公設定 & a m p ・サーヴァント

名前：神堂 シンドウ 元 ハジメ

肉体年齢：26歳

身長：195cm

体重：78kg

イメージカラー：黒

特技：空手、柔術、八極拳、システム、合気道を組み合わせた我流の体術 剣術 槍術 弓術

趣味：読書 歴史、神話の独学 鍛練

魔術回路：メイン120 サブ70

魔眼：流動の魔眼

人間の可能性を信じる事が出来たため、本当の力を取り戻した真の調整者。

調整者とは根源：根源の渦のアカシックレコードに記されているイレギュラーによる破滅の結果を正すものこと。

その力は、管理者群に帰属されており、彼らの要求の下行動する。

かつて、あらゆる魔法にも属さない異端の魔法をもって根源に至った存在を管理者が掬い取り調整の役を授けた。

しかし、その力はガイアやアラヤ、抑止力、英霊といった神秘に比べあまりに脆弱であり人間の域をでることができない。

戦闘スタイルは剣による白兵戦がメインであり彼が用いる五大元素や様々な魔術はあくまで補助にすぎない。

義手に隠されているナイフ、アンカーや圧倒的な戦術幅、剣、槍、弓、体術を効果的に用いて身体的スペックの勝る英霊とも対等に渡り合うことが出来る。

神堂元が英霊達と同等の戦闘を演じられるのは、彼が生前に養ってきた圧倒的なまでの戦術幅と魔眼の力によるものが大きい。

魔術師の腕は超一流であり、最高の才をもち、彼が唯一の超一流となれる分野でもある。

また、世界から外れたことにより彼には起源は存在せず、「」である。

身体スペック

筋力 B 耐久 B 敏捷 B 魔力 A + 幸運 C 宝具 E A ++

所持スキル一覧

流動の魔眼：あらゆるモノの流れを読むことが出来る魔眼。それは
当人によってオン・オフが可能であり、視ようとすれば世界の流れ
：未来視も可能である。

しかし、それには脳に多大な負担がかかり、廃人になる可能性も高
い。

これを用いて、彼は対人・対神秘に対する戦闘を優位に進めること
が出来る。

創造：彼の魔法であり、第1～6までも属されない異端の魔法。調
整者にまで昇華された最大の要因。

創造の名の通り、対象を理解さえすれば対象と全く変わらないレベ
ルのモノを創れる。これによって本来ランクの下がる投影を彼はラ
ンクを下げることなく、完全な状態で造り出すことが出来る。

また、元は根源に至ったため魔力さえあれば新たな命もあまつさえ
世界すら創りだす事ができる。

心眼（真）：Bランク

修練・経験の積み重ねによって得られる物。得られた情報と戦闘経
験に基づく冷静な状況判断によって活路を見出すことができる。

カリスマ：Cランク

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力であり、Cランクは
軍を十二分に率いることができる。

騎乗：Bランク

乗り物を乗りこなす能力であり、魔獣・聖獣ランク以外を乗りこな
すことができるが竜種は範囲外である。

軍略：Bランク

多人数戦闘における戦術的直感能力。

圏境：Bランク

気を用いて周囲の状況を感知し、自らの存在を隠蔽する技法。極めれば天地と合一し、姿を自然に透け込ませることができる。

陣地作成：Aランク

魔術師固有のスキル。

戦闘続行：Bランク

決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能とする。曰く、泥水啜っても生き延びる。

対魔力：Cランク

第二節以下の詠唱による魔術を無効化し、大魔術・儀礼呪法など大がかりな魔術は防げない。これは彼自身にあるモノではなく、彼の羽織っている黒のコートに施されている。

魔眼：A＋ランク

流動の魔眼

魔術：A＋＋ランク

魔術を修得していることを表し、A＋＋ランクは魔法使いのレベル。

以上上記のスキルは全て、サーヴァントに与えられるものだが、彼もまた似て非なる存在のため、該当するスキルを記す。

しかし、この該当する殆どのものは生前の彼の行いから来るものである。

煉獄刀・紅蓮レンゴクトウ：ケレン - - ランク（Bランク相当）

再世者である付喪海から受け取った異界における鬼神の一振り。
真紅の刀身が指し示すは圧倒的な破壊である。
血肉を吸えば吸うほど、その切れ味は鋭くなり刀身は赤く染まっ
ていく。
本刀剣は再世者から受け取ったものであり、世界からの制限は元
にかからないため、彼の固有武装となっている。

名前：クー・フリーン

肉体年齢：25歳

身長：185cm

体重：70kg

イメージカラー：青

特技：魚釣り 素潜り 山登り

好きなもの：気の強い女 無茶な約束

属性：秩序・中庸

槍兵の英霊。高い瞬発力と白兵戦の能力を備え、紅い魔槍を持つ。根は実直で、口は悪いが己の信念と忠義を重んじる英霊らしい英霊と言える。

元との最初の出会いは戦いを目撃した一般人として聖杯戦争の掟に基づき士郎を殺そうとした際に出会った。

当時は一般人であった元を舐めてかかり、撃退されたことから彼に興味を持った。(それでも、彼は本来の実力の数分の一も出していない)

元が知りうる限り、最速最高の槍使いである。

また彼は、元のことを友達タチだと思っている。

真名はクー・フリーン：ケルト神話最大の英雄である。

生前は父である太陽神ルーと母であるコノア王の妹デヒテラの子供として生まれる。

少年時代(七才程)の時に鍛冶屋クランの獯猛で有名な番犬に襲われたところ、たった一人で番犬を絞め殺してしまった。

その際に、愛犬の死に嘆くクランに次の番犬が見つかるまで、自分が貴方の番犬となりましようと思し出た所、王からクー・フリーンの名を授かる。(意味はクランの猛犬)

また、その際に犬の肉を食べないという禁忌 ゲツシュ を立てた。

青年期は領主フォーガルの娘エマーに求婚するが断られたため(立派な戦士になってから向かいに来て：の意味で)、影の国を訪れ女王スカアハの下で修行を行う。

スカアハの下で武術と魔術を習った。彼女の下には彼以外にも修行を行う仲間がいたが、その中でただ一人ゲイボルグを授かることになった。その後、帰国したクー・フリーンだが、フォーガルはエマーとの結婚を許さなかったので、フォルガルを打倒してエメルを

娶った。

コノートの女王メイヴとの戦いで、修業時代の親友フェルディアを
ゲイボルグで殺してしまった。また、彼を訪ねてきた息子コンラを
それと知らずにゲイボルグで殺してしまう。

彼の最期はゲツシュを破り、半身が痺れたところを敵に奪われたゲ
イボルグに刺し貫かれて命を落とす形となったが、その際にこぼれ
落ちた内臓を水で洗って腹におさめ、立ったまま死のうと巨石に体
を縛りつけ息絶えた。

身体スペック

言峰綺礼	：筋力 B	魔力 C	耐久 C	幸運 C	敏捷 A	宝具 B
神堂元	：筋力 B	魔力 B	耐久 B	幸運 C	敏捷 A	宝具 B

所有スキル

対魔力：C

第二節以下の魔術は無効化する。大魔術や儀式呪法などを防ぐこと
はできない。

戦闘続行：A

往生際が悪く、瀕死の状態でも戦闘を続行するスキル。
伝説に謳われたクー・フリーンの戦い方が由来から来る。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

ルーン：B

北欧の魔術刻印・ルーンを保有。

ルーン文字は北欧神話の主神オーディンが、自身の命を囿に巨人から盗んだものである。

矢よけの加護：B

視界内からの飛び道具の攻撃への対処能力。

ただし、超遠距離や広範囲攻撃には無効。

彼の射的武器への耐性は“風切り音と敵の殺気”から軌道を読む。

神性：B

神霊適性の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが深いことをしめしている。

神の子。

宝具

刺し穿つ死棘の槍ゲイボルグ：Bランク

必中必殺の呪いの槍を使用して因果を逆転し“敵の心臓に命中している”という結果を作った後に原因を放つ対人宝具。

対人戦の際には絶対的に有利なモノとなる。

なお、発動したと同時に「心臓を貫いたという結果」が成立しているため、仮に放った直後でランサーが死んだとしても、槍はひとりで動いて相手の心臓を貫く。

つまりは、余程の幸運の持ち主で無い限り使われたら負けとなる正に必殺の一撃である。

突き穿つ死翔の槍ゲイホルク：B＋ランク

渾身の魔力と力を持って投擲して放つ、前者が命中を重視したものでならば、こちらは威力を重視している。

一撃で一軍を吹き飛ばす威力がある。

因果を歪ませる呪い及び必中効果は健在であるものの概念的な特性や運命干渉などは無く、あくまで単純威力系宝具に分類される。

それでも“放てば穿つ”という呪いの効果により、何度かわされようと標的を捕捉し続け、防御しようとも槍の神秘を上回らないかぎり、槍は進み続ける。

名前：エミヤ シロウ

年齢：27歳

身長：187cm

体重：78kg

イメージカラー：赤

特技：ガラクタいじり、家事全般

好きなもの：家事全般（本人は否定）

属性：中立・中庸

聖杯戦争時に、凜と契約した弓兵の英霊。キザで皮肉屋で現実主義者だが、根底の部分ではお人好し。

弓兵のクラスでありながら、二本一対の陰陽の夫婦剣“干将・莫耶”による白兵戦を好む。

彼は干将・莫耶の究極技ともいえる“鶴翼三連”の発動呪文も発動可能であり、弓兵として、剣を变化の魔術で加工し、“偽・螺旋剣《カラドボルグ?》”をなどを扱う。

さらには、ランサーとの戦闘の際に、ギリシヤ神話のトロイア戦争にてアイアスが使用した盾で、投擲に対しては無敵とされる“熾天覆う七つの円環”なども使用するなど、規格外かつ正体不明な英霊であった。

真名はエミヤ。

とある未来の世界で死すべき百人を救うために世界と契約した衛宮士郎その人であり、全てを救うという理想を追い求め続け、世界と契約を交わし、その百人を救った。

だが、現実には“霊長の守護者”：アラヤの劣兵という残酷な現実であった。

理想を追い続けたその生涯は最後まで報われることなく、彼は自分が助けた相手からの裏切りによって命を落とす。

それでもなお、誰一人恨むことはなく、笑顔で死んでいった。

英霊となった彼に与えられた役割は霊長の守護者として、拒絶可能な虐殺に身を投じることだった。（全てを救うことなく、9のため1を切り捨てる）

その過程で人の暗黒面をまざまざと見せ付けられ、理想への絶望を見た。

後悔の先に見たものは、過去の自分を殺して輪から逃れるという限りなく0に近い奇跡に思いを託すことだけだった。

その後、聖杯戦争においてサーヴァントとして召喚された彼は様々な謀略を張り巡らせて、衛宮士郎を殺そうとしたが、結局は彼もエミヤであり彼の正義の味方への思いを認めてしまうという結果に終わった。

その後、魔法に目覚めかけた元の手により、消滅を免れ聖杯戦争の影を共に戦い抜いた。

元とは皮肉を言い合える仲という、数少ない男友達という仲である。

身体スペック

遠坂凜：筋力D 魔力B 耐久E 幸運C 敏捷C 宝具
神堂元：筋力C 魔力B+ 耐久C 幸運C 敏捷B 宝具

所有スキル

対魔力：D

一工程による魔術を無効化する。

効果としては魔除けの護符程度である。

単独行動：B

マスターからの魔力供給が無くなったとしても現界していられる能力。ランクBは二日程度活動可能。

千里眼：C

純粋な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。
高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

魔術：C

オーソドックスな魔術を取得している。

心眼（真）：B

修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。
わずかな勝率が存在すればそれを生かすための機会を手繰り寄せる
事ができる。

宝具

アンリミテッドレイドックス

無限の剣製：E A++

リアリティ・マープル。

空想具現化の亜種であり、術者の心象風景で現実世界を塗りつぶし、
内部の世界そのものを変えてしまう結界のことを言う。

本来は悪魔が持つ異界常識であるが、長い時間を掛けて“固有結界”
を形成する魔術が確立され、一部の人間が使用可能となっている。
魔法に最も近い魔術とされ、魔術協会では禁呪のカテゴリーに入り、
魔術師たちにとっては最大級の奥義であり、魔術の到達点のひとつ
とも言われている。

エミヤの固有結界はオリジナルを目視するだけで、その剣を解析・
複製し結界内に貯蔵するというもの。

この固有結界による複製品はオリジナルと比べてランクが一段階下

がっつてしまっが、宝具すら複製可能で使い手の経験や技術も武器の記憶として投影されており、その記憶を元にある程度使いこなすことや“真名解放”すらも使用可能となるなど規格外の性能をもつ。

しかし、彼の属性は剣なため、良くも悪くも剣に特化しており、剣以外を投影するとなると、ランクはさらに下がり魔力の消費量も数倍となる。

さらには、固有結界の暴走の際には、体中から剣が内部から貫き術者本人の命を奪いかねないなど、デメリットを見るとかなり危険なものである。

だが、これによりエミヤは相手によって有利な様々な宝具を使い戦闘を有利に進めることができる。（不死のものには不死殺しの剣を用いるなど…）

第1話 使い魔と騎士

本日何度目の爆発だろうか？

目の前にいる桃色がかったブロンドの長髪と鳶色の瞳を持つ少女がその発生源だ。

ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール…実際に長つたらしい名前だと思うが、私も人のことは言えないのでそれは置いておこう。

今日行なっているのは使い魔を呼び出す“春の召喚の儀”で、ここはトリスティン魔法学校である。

この儀式は1年生が2年生に進級するために必要な、とても重要なものである。

進級を覗いても、呼び出された使い魔の種族や特徴などにより、そのメイジがどの系統のメイジかを確定させるという意味でも、とても重要な儀式だ。

例えば、私から離れた（と言っても、それほど離れていない）位置にいる“香水”の二つ名を持つモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシはカエルを呼び出した。このことから彼女は水系統のメイジということが確定されたと言っている。

そして、私の隣で本を読んでいる親友で無口な少女タバサは風竜を呼び出した。

その事から、彼女は風系統に特化したメイジということが解る。だけど、まさか竜を呼び出すなんて思わなかった。

確かに彼女は15歳という年齢でトライアングルメイジという優秀なメイジではあるが、竜を呼び出したことから彼女の才能の高さが窺える。

親友として、私も鼻が高いわ。

ついでに、というか私はサラマンダーを呼び出した。

タバサの使い魔に負けず劣らずの最高の使い魔だと親馬鹿？ながらに思っている。

まあ、そんな感じで私は火系統のメイジということが解る。

そして、名前はフレイムって名前にしたの。

この鮮やかで大きい炎の尻尾持つてる火トカゲなんか、絶対に火竜山脈から来に違いないわ。

だって、こんなに美しいんだもの！

……、取り乱してしまっただわね。

話を戻すと、未だに爆発を起こしているルイズは召喚が上手くいっていないのだ。

ルイズは所謂、落ちこぼれと呼ばれている。

その理由は魔法が一切使えないからだ。

魔法を使おうとすると、全てが爆発という形で起こってしまうからだ。

火、水、風、土の4系統全てが爆発になってしまうのだ。

彼女の家は、トリステイン屈指の名門貴族であるヴァリエール公爵家であり、その始祖はトリスタン王家の庶子である。

そして、彼女の両親はトライアングルとスクウェアという、魔法の才能が引き継がれなくては可笑しいくらいの最高の血筋なのだ。

流石に可哀想だと思う。

彼女が家名を前に出すだけの人間なら、大して可哀想だと思いきもないのだが、そうではなのだ。

彼女の努力量は間違いない、学園一である。

勉強も人の2倍も3倍もしているし、結果として実践魔法を除いた

座学ではほぼ学年トップの成績を収めている。

そんなこともあるから、周りの人間からは“ゼロのルイズ”（魔法の成功率0）などという不名誉な二つ名まで付けられている。

かくいう、私もそういう風に言っ、彼女をからかっているのだが…。

私の実家であるツエルプストー家とルイズの実家であるヴァリエール家とは国境を挟んだ隣通しであり、トリステインとゲルマニア両国の戦争ではしばしば杖を交えた間柄であるため、所謂仇敵という言葉である。

だからと言っ、私がそれを意識して、彼女をからかっている訳ではない。

確かに、あの無駄に高いプライドは好ましくはないが、彼女の努力に対する姿勢は嫌いじゃない。

なら何でからかうのっか？

反応が面白いからよ。

あの子は私のことを、友達だとは思っていないかもしれないけど、私はそれなりに大切な友達だと思っている。

だから、そろそろ報われてもいいんじゃないの？

そんなことを思っていると、ふと幼い頃の思い出が頭に駆け巡った。昔、お父様が『神は救いを与えはしない…与えるものは乗り越えられる試練のみだ』なんて言っただけど、これがルイズにとっての試練だというの？

だとしたら、余りに可哀想すぎる。

ねえ、神様…そろそろ報われてもいいんじゃないの？

憂鬱な感情が沸き上がり、思わずため息が出てきた。

なんで上手くいかないのよ！

ルイズは焦っていた。

いや…もはや情けなくて悔しくて、怒りすら生まれていた。

私は魔法の発動が成功したことがない。

だから、周りにはゼロのルイズなんて馬鹿にされてきた。

そのたびに、ヴァリエールの名前をだされて、お父様やお母様、姉様達にどれだけ恥をかけてきたかわからない。

勉強は人の何倍もしてきた自負はある。
だから、座学の成績はほぼトップだった。
なのに…知識はあるのに、魔法の実践となると必ず失敗する。
必ず、爆発が起きるのだ。

今だって、盛大に爆発している。
ここまで盛大だと馬鹿にされているようで、余計にイライラしてくる。

周りでは、クラスの皆が声に出さないように小さく笑っていたり、馬鹿にするような目で見ている。

コルベール「ミス・ヴァリエール、今日はこの辺にしてはどうですか？」

この儀式の監督官である、ミスタ・コルベールは諦めるように促してくる。

諦める？

冗談じゃない。

こんな所で諦めたら、それこそ進級出来なくなる。

そんなことになったら、家になんて言っただいのか解らないし、周りからはさらに家のことを馬鹿にされる…私一人のせいだ。

ふと、視線をずらすとキュルケがため息をついていた。

…負けたくない。

誰かに負けるのも、自分に負けるのも嫌だ。

だけど、ツエルプストーの女に負けるのは死んでも嫌だ！

ルイズ「ミスタ・コルベール、お願いです、もう一度だけ召喚させてください！」

そんな風に思っていたせいか、今まで出たことがないくらいに鬼気迫るものが出てしまった。

それに押されてか、ミスタ・コルベールはたじろぎながらも後一回だけだと了承してくれた。

周りの生徒たちは、成功するはずがないだろなんて罵声を浴びせてくるが無視して、サモン・サーヴァントの呪文を詠唱する。

ルイズ「宇宙の果てのどこかにいる、私の下僕よ！

強く、美しく、そして生命力に溢れた使い魔よ！

私は心より求め、訴えるわ。我が導きに応えなさい！」

お願い、私の召喚に応えて！

呪文を詠唱しながらも、今まで以上に強く心の中で祈る。

しかし、起きたのは爆発であつた。

ただ、その規模は今まで以上に大きなものだった。

コルベールや周りの生徒たちは爆発の規模に驚きながらも、また失敗かと思つたのだが、当の彼女は違和感を感じていた。

ルイズ「…あれ？　なんだろう…この感じ」

何かとは言えない。

だけど、今まで以上に大きく起きた爆発の中から現れたのは3人の人間だった。

???「爆発と落下はお前の専売特許のはずだったんだがな…」

???「誰が好き好んで、そんな召喚を望むか」

???「まあ…別にいいんだがよ。　なんつう強引な召喚だよ…」

青の騎士と赤の騎士、そして…黒の戦士がそこにはいた。

ランサー「それにしてもよ、いつまで続くんだ？」

アーチャー「いくら、異世界へ渡る為とはいえ…ここまで強引な召喚など聞いたことがない」

二人の愚痴を聞きながら、俺は黙って前に進む。

どっちが上で下かも解らない、道のない中をただ前に進む。
光はない。

かといって、暗闇でもない。

なんとも不思議な空間ではあるが、俺はこれが3度目だ。
クーとエミヤには2度目など言ったが、正確には3度目なのだ。
とは言っても、1度目は数日間しか居なかったため、ある意味2度
というのは正しいと思う。

元「先に言っておくが、お前らは受肉している」

アーチャー「やはりな…どこか違和感があると思っていたが、受肉
していたか」

ランサー「これはお前がやったのか？」

元「いや、向こうの管理者がやったんだろう…とはいえ、お前らは
英霊だ。並のルーンではお前ら縛ることは出来ない」

英霊とは過去、その偉業によって多くの人々の想いを受け世界に招
聘された存在だ。

故に並の魔術師程度では彼らを御することなど叶わない。

元「そこでだ、向こうの管理者が用意したシステムに従って、令呪
を受けることになるだろう」

ランサー「なんでだ？ そんなもん、お前のサーヴァントになれば
良いだけの話だろ？」

魔術師ではなく、魔法使い兼調整者の俺ならば英霊も御することは
可能だ。

勿論、令呪に頼らずだ。

しかし、ここで一つの問題が発生する。

アーチャー「ランサーよ…それは叶うまい」

ランサー「どういうことだ？」

アーチャー「我らを召喚したのは元ではなく、向こうの人間なのだ…そうだろ？」元

元「そういう事だ。それに向こうの召喚には一つの大きな意味がある」

ランサー「大きな意味だ？」

世界の命運と比べれば、さしたる問題ではない。しかし、それでは向こうの召喚主が流石に可哀相である。

ふと、彼らから前に視線をずらすとそこには光が見えた。

元「ゴールか…この話は向こうでする」

????『宇宙の果てのどこかにいる、私の下僕よ！

強く、美しく、そして生命力に溢れた使い魔よ！

私は心より求め、訴えるわ。我が導きに応えなさい！』

耳に聞こえるのは恐らく向こうの召喚主の詠唱だろう。

その声はなんとも気の強い少女のものと思える。

ハルキゲニアの気の強い少女といえば、彼女を思い出す。

思わず、苦笑いをしてしまった。

彼女は元気だろうか？

なんて思ったが、下手をしたら何百年も経ている可能性があるため、生きていない可能性がある。

こんな空虚にも似た感覚も既に慣れている。
調整になってから、既に何度も経験している…。

ランサー「なんだ？ こいつは」

アーチャー「詠唱も何も無いな…酷く傲慢で神性の欠片も感じない。
だというのに、この強制力は…」

元「(何だ…この感覚は。 前とは違う…いや、この感覚を俺は知っている?)」

各々に感じる感覚を残したまま、俺達は爆発に巻き込まれた。
…これは、アーチャーの領分だろ!!

爆発の影響で閉じてしまった目を開けると、そこは先程までの空間
ではなく、俺の知る学園の広場だった。
ふと、出てしまった言葉は各々に不満いっぱい愚痴だった。

元「爆発と落下はお前の専売特許のはずだったんだがな…」

アーチャー「誰が好き好んで、そんな召喚を望むか」

ランサー「まあ…別にいいんだがよ。 なんつう強引な召喚だよ…」

目の前には多くの学園の生徒たちと桃色がかった長髪の少女だった。

???「あんだ達…誰!？」

謝罪がくるとは思っていなかったが、浴びせられたのは避難にも似た言葉だった。

三人「はあ…」

思わず、ため息がでたのは仕方のない事だろう。
それにしても、彼女に似ている…。

ルイズ「あんた達…誰!？」

目の前の少女は不機嫌そうにそう言った。

回りの少年たちと同じ年と考えると、年はおそらく15、6歳ほど
であろうが年齢よりもずいぶんと見た目が幼いように見える。

そんな彼女は黒いマントの下に、白いブラウス、グレーのプリーツ

スカート、髪は桃色がかったブロンド、そして透き通るくらいの白い肌、そして鳶色の目が踊っている。
その容姿は美少女といっても謙遜ではない。

元「俺たちか？ 君に召喚された者のはずなのだがな…」

ルイズ「召喚された者って…まあいいわ。それで、どこの平民」

平民か…。

あいも変わらず、鬱陶しい差別だ。

なんと答えようか考えているうちに、クーが口を開いた。

ランサー「なあ、平民ってなんだ？」

元「…ん？ ああ、ハルキゲニアでは貴族が平民を統制する所謂、貴族政治で成り立っているのさ」

ランサー「貴族政治ね…随分と古めかしいことをやってんだな」

アーチャー「クツ…それを君が言うのかね？ ランサー」

ルイズ「ちよっと！ 私の質問に答えなさいよ！」

俺たちだけで会話していたのが気に入らなかったのか、桃色髪の少女は癩癩を起こしたかのように怒鳴っている。

元「…そうだな、取り敢えず質問に答えてもいいのだが…その前にそこにいる教師に杖を下げるように言ってもらえるかな？ あと、水色髪の少女にもだ」

コルベール・タバサ「!？」

ルイズ「え？」

まさか、気づかれると思わなかったのか彼女と彼は驚いた顔をしている。

教師は汗を流しながらも、大人しく杖を下げたが、少女は改めて杖を構える。

タバサ「……」

キュルケ「ちょ、ちょっとタバサ!？」

隣にいる彼女の友人であろう褐色の肌の少女が慌てる中、当の彼女は極めて冷静になんの感情もないように見える。

コルベール「ミズ・タバサ……」

タバサ「……」

教師からの言葉でようやく、杖を下げた彼女に俺はため息を漏らした。

ランサーは面白いものが見れたとニヤニヤ笑っており、アーチャーは渋い顔をしている。

緊迫した空気の中、召喚主の少女は一体何があったのか解らないといった顔をしており、自分の解らないことがあるためか余計に不機嫌な雰囲気を出す。

しかし、周りの生徒たちはそんな空気を感じ取ることができなかったのか、少女を嘲笑うかのように罵声を浴びせる。

生徒A「ルイズ、“サモン・サーヴァント”で平民を召喚してどうするのさ?」

ルイズ「ちよつと間違えただけよ!」

生徒B「間違いつて、ルイズのそれはいつもの事だしなあ」

生徒C「さすがは“ゼロのルイズ”。平民を使い魔にするなんて聞いたことないよ!」

ふむ…生徒たちの言葉から推測しよう。

このルイズと呼ばれた少女は使い魔を召喚しようとして、私たちを呼び出すゲートの触媒に使用された…といったところか。

つまりこれは彼女にとっては完全な事故だろう。

我が身は守護者だ。

調整たる元によって守護者本来の役目ではなく英霊としての私が正義の味方という夢を叶えることに従事できることは今まで幾度かあった。

そして、今回もその一つである。

それは、まだ悲劇が起こっていない世界に召喚されたということ。

つまりは一つのチャンスではないか?

私が“正義の味方”を目指すことができるのではないのか?

そう思うと、目の前にいる少女が罵倒されているのは気分が悪い。どのような形であれ私に一つのチャンスを与えた形になった彼女を放って置くわけにはいかない。

だが、元は未だに水色の髪をした少女と教師であろう男から目を逸らしていない。

しかたない…私がなんとかするか。

アーチャー「君達」おい…「テムエ等」ふむ…」

どうやら、私の役目はないようだ。

ランサー「仮にとはいえ、俺を召喚したマスターを侮辱したんだ…
覚悟はできているんだろうな？」

ランサー…「クー・フリーンは私などとは違い実に英霊らしい英霊と
言える。」

普段の飄々とした彼からは想像しできないが、彼は私などとは比べ
物にならないような誇り高い“英雄”なのだ。

そんな彼としては、自らのマスターになる少女が侮辱されている…
ということは自分の誇りが侮辱されているということと同意義なの
だ。

生徒B「な、なんだ！ 平民風情が貴族にたてつくのか！」

明らかに、ランサーの雰囲気呑まれている。

10代半ばの少年少女などでは、彼の威圧に勝てるはずもない。
現に少年の声は震え、存在は空気の抜けた風船の如く萎んでいる。

だが、貴族か…なるほど。

ふと脳裏に浮かんだのはロンドンで出会った少女と独りの少女だっ
た。

彼女は優雅さと気品…そして、高いプライドの中でも感じる優しさ
を感じるものだった。

そして、私が衛宮士郎として召喚した少女は独りだった。

今こそ元がいるからいいが、あの時の彼女は独りだった。

それでも、誰よりも誇り高い騎士で誰よりも優しい王で、誰よりも
独りだった。

だが、目の前にいる彼ら彼女らは何だ？
これが貴族か？

いや、違う。

認めたくなどない。

生徒C「なんて、生意気な！」

アーチャー「ふむ…敵意を向けるといふことは、その覚悟があると
見ていいのだな？」

ルイズ「え？ あ、あんた…」

ランサー「アーチャー…、 テメエ…」

アーチャー「何、気にするな。 私としても、マスターがこうまで
罵声を浴びるのは忍びない…。 それだけだ」

こんなモノが貴族など、認めてはいけない。
そんなことをしたら、ルヴィアにもセイバーにも顔を合わせられな
い。

生徒一同「…!?!」

元「チツ！」

コルベール「な…!?!」

ルイズ「うつ…」

余りに濃厚な殺意に目の前の生徒たちは顔色を悪くしている。
それもそうだろう…。

かの者たちは英雄だ。

勝ち目のない戦い？ 命の危機？ 守られなかった者？ 救えなかつた者？ 戦争？

そんなモノは彼らにとっての日常だったのだ。

そんな中で生きてきた彼らの意思の塊に高々十数年しか生きていないガキに耐えられるものではない。

後ろにいるルイズにかからないように殺意を向けようとその余波ですら、ルイズ、も気持ち悪そうにしている。

元「……」

ランサー「…なんの真似だ」

元「その殺気をしまえ…クー、エミヤ」

ランサー「人のマスターを侮辱したのは…悪いのはそこにいるガキ共だろうが」

アーチャー「流石に今回はランサーの意見に賛成だ。 私としても、あのような愚劣な存在を貴族などと認める訳にもいかん」

元「言いたいことはわからんでもない…しかし、当のマスターにまで殺気を浴びせてどうするんだ？」

ランサー・アーチャー「…！」

彼らはルイズに視線をずらとようやく気づいたのか、少しづつ殺気を押さえ込んでいった。

元「それに、まだ使い魔の契約も終わらせていない…少し落ち着け」

鋭い眼光が彼を捉える。

それようやく彼らも落ち着きを見せた。

とはいえ、ランサーはかなり渋っていたように見える。

ランサーはせめて、自らのマスターを侮辱した生徒たちへ睨みでもきかせようとその方向に視線をずらしたが、そこでは恐らく教師である男が一部を覗いて罵声を浴びせていた生徒たちを叱りつける姿が見えた。

コルベール「あなた達も誇り高い貴族ならば、つまらない事で他人を貶めるような言動は慎みなさい！」

生徒一同「……」

先程の殺気を浴びていたせいもあるのか、教師の男の説教も相まって彼らの顔色は悪い。

いい気味だ…そう思うくらいはいいだろう。

元「ルイズとやら…気分は大丈夫か？」

ルイズ「え、ええ…大丈夫よ」

先程までよりもずっと血色は良い。

まったく、来て早々問題を起こすのはやめて欲しいものだ。

しかし、当の本人であるランサーは全く悪びれる様子もない。

アーチャー「マスター、すまないな」

ルイズ「あなた達、本当に平民？」

元「うん？」

ルイズは疑問に思った。

只の平民にここまで濃密な殺気が出せるものなのかと…。

今の今まで殺気というもの受けたことの無い彼女ですら理解できた
明確な殺気を…。

私が呼び出したのは本当に平民なのか…。
もしかして、どこかの国の騎士様を呼び出してしまったのではないか？

よく見れば、青のボディースーツは鎧だし、赤の外套の下にあるのは黒色の鎧ではないか…。

もう一人の男もあの殺気の中でなんともないように動けることから、彼も平民ではないように思える。

だけど、返ってきた返答はそんな私の疑問を全て吹き飛ばすくらい簡単なものだった。

元「平民だよ…君たちの概念からしたらな」

本当にそうなんだろうか…。

だけど、残りの二人も貴族ではないと答える。

私の思い過ごしだったのかな…。

元「さて…中断してしまったようだが、契約の続きといかないか？」

ルイズ「…！ わ、解っているわよ！ 平民のくせに偉そうにしないでよ！」

元「はいはい…」

自分から言っただけだが、使い魔の契約の契は少し憂鬱になる。

その内容もそうだが、その結果俺に対しては何もないのだ。

しかし、それに待ったをかける人物がいた。

コルベール「少し待っていただいても宜しいですか？」

元「失礼…貴方は？」

コルベール「失礼しました。私はここトリスティン魔法学園で教師をしております、ジャン・コルベールといたします。随分と落ち着いていられるようですが、貴方「元だ」…ハジメ様は本儀式を理解しておられるのですか？」

元「それなら問題はない。昔、同じように召喚されたことがあるのでな」

コルベール「そうですか…って、貴方は既に使い魔として契約されているのですか!？」

ルイズ「ええ!？」

そう言えば、言ってなかったな。

後ろのクーとエミヤも初めて聞いたというような顔をしている。仕方ないだろ？

説明の途中で召喚されたんだからな。

元「その点は、問題ない…。俺は体質の問題で使い魔として契約できない。だから、誰かの使い魔というわけではない」

コルベール「契約できない？　ということは、ハジメ様は使い魔にはなれないということですか？」

元「すまないがな…まあ、俺が契約できなくとも後ろの二人が代わりに契約してくれるだろ」

今になって理解した。

何故、制限も無い状態でカニバルもいないというのに英霊二人をつ

れていったのか…。

俺は使い魔にはなれない…ということは目の前にいる少女は進級出来ないということだ。

つまりはそのため英霊を一人、そして予備に一人…ということなのだろう。

コルベール「しかし、よろしいので？ 見たところ、御二方は高名な騎士様とお見受けしますが…」

元「先も言ったが、今は只の平民だ…何の問題もない。 というか、そうしなければ彼女が進級できないだろう？」

アーチャー「元、進級とはどういうことだ？」

元「ここトリスティン学園では1年から2年へ進級する一つの条件として、使い魔の召喚が義務付けられている。そして、その呼び出した使い魔によって本人の魔法の系統が決まる…ということだ」

アーチャー「…ふむ」

ランサー「魔術の系統ねえ…」

ルイズ「あんだ、平民の癖に随分と詳しいのね」

元「ここの学園長とは知り合いでな…」

ルイズ「オールド・オスマンと？」

元「そう…あのエロ爺とな」

元気にしてるんだろうな…あの妖怪。
何故だか知らんが絶対に生きているだろう。
殺しても死なないようなジジイだ。

元「まあ、そんな訳だ。俺は君の使い魔になれんが、その二人が君の使い魔になってくれる」

ルイズ「平民を使い魔にしたって、なんの自慢にもならないわよ…」

ランサー「まあ、そう言うな嬢ちゃん。少なくともそこらへんにいる生モノに比べりゃ、役に立つぜ？」

アーチャー「…まさか、幻想種に出会えるとは思わなかったが、少なくともここにいる奴らに比べればマシだと思うがね」

ルイズ「平民の癖に偉そうなのよ！」

自分たちの使い魔を馬鹿にされ流石にいい気はしないのが、周りの生徒たちは青筋を額に浮かべている。
しかし、ここでまた騒ぎ出せば面倒になると理解したのか、騒ぎ立てることはしなかった。

元「二人ともそこまですておけ、これ以上問題を起こすようならば、俺もそろそろキレルぞ？」

ランサー「…！ チツ、わあっ たよ」

アーチャー「う、うむ…了解した」

元「はあ…ルイズとやら、待たせたな。それでは頼む、ミスタも

それでいいかな？」

コルベール「…わかりました。 ミズ・ヴァリエール…」

ルイズ「わかりました」

いまいち納得出来ないような少女にコルベールは契約をするように促す。

先ほどまで、騒がしかった広場は一瞬で静かさを取り戻した。そして、その中心にいたのは一人の少女と二人の騎士だった。

ランサー「サーヴァント・ランサー、召喚に応じ参上した。

これより我が身、我が槍は御身が下にある。

我が名、我が誇りに懸けてここに誓約する」

アーチャー「アーチャーのサーヴァント、召喚の呼びかけに応じ参上した。

これより我が身、我が弓、我が武具全ては君が下にある。

我が名に懸けてここに誓約する」

少女の前で片膝を付くその姿は、ハルケギニアの人間から見ても、あくまで無謬、どこまでも優美な“騎士”の礼だった。

騎士達は今や一片の疑いも無く、艶と勇ましさのある声で、朗々と誓約を謳いあげた。

その姿が予想外に立派で、優雅であり、従順な騎士の仕儀にルイズは赤面してしまった。

いくら公爵家の娘とはいえ、このように騎士から忠誠を誓われることなどこれまでの人生で無かったのだ。

どうしたらいいのか…。

そんな思いが頭の中で駆け巡り、ショート寸前だった。

そして、どうしていいかわからなくなってしまう、コルベールに助けを求めてしまった。

ルイズ「ミ、ミスタ！ こ、こここの場合どうしたら！？」

しかし、助けを求められたコルベールも驚いていた。

今の今までこれほど優雅な所作を目にしたことはなかったからだ。そして、その優雅さのなかにも隠しきれない勇ましさが出ている。これほどまでの騎士だとは思わなかったのだ。

只の平民ではない…それは確信していた。

それ故に、これ程までに…驚いてしまった。

コルベール「契約しなさい。君が呼び出し、彼等も答えると言ってるんだ」

現に彼女に忠を誓うと言っている。

樂觀視しているのかもしれないが、危険は無いと見ていいだろう…。

いや、もはや確信だ。

少なくとも彼女に危険はない。

それを感じさせるほどまでに、彼等の礼は従順だった。

ルイズ「でも…」

ルイズは反論しようとするが、うまく言葉にできなかった。

いくら使い魔として呼び出したからって、こんなにも立派な礼ができる騎士を自分の使い魔にしているのか。

周りは静寂で満ちている。

先程まで私を馬鹿にしてきた生徒たちも、その騎士の所作に目を奪われているようだ…。

そして、目の前で膝を付いたままの彼らは私の言葉を待っている。

ルイズ「（でも、召喚をやり直す魔力も無いし、とりあえず強そうだし、それにいつまでも跪かせておけないし…しょうがないわよね！）」

自分の中で取り敢えず正当化させた少女は彼等の下に近づくと、コントラクト・サーヴァントを唱えた。

ルイズ「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

5つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

詠唱を終え、未だに騎士の礼を取り続ける男の顔を持ち上げて口づけをする。

本来ならば、この後に使い魔のルーンが彼らに刻まれるのだが…。

ルイズ「い、痛い！！」

それは彼らだけではなく、少女にも現れた。

彼女には歪な刺繍のようなものが両手の甲に現れ、彼らには左手に一つのルーンが現れた。

ルイズ「っな、なんで!?!」

コルベール「これは…」

元「詳しくは後で説明してやる…。しかし、今はまだ契約の途中だ…」

契約の途中？

この男は何を言っているのだろうか…。

というか、なんで私にルーンが刻まれてるのよ！

私に使い魔になれっての！？

しかし、彼女の苦悶に満ちた顔とは別に騎士達は契約の言葉を唱える。

彼女が行なったものはあくまで使い魔としての終わりである。

しかし、騎士との契約はまだ終わってはいないのだ。

ランサー「ここに契約は完了した。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール…。

我が名、我が誇りに懸けてここに誓約する。

これから先、我が身、我が槍は御身が下にある」

アーチャー「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ、我がエミヤの名において誓う。

我が剣、我が弓、我が武具の全ては君と共にあり、君の運命は私と共にある。

ここに契約は完了した」

再び目を奪われた。

そうだった。

これは只の使い魔の契約ではないのだ。

これは…私（主）と使い魔（騎士）との主従の契約なのだ。

ルイズ「…初めまして、私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。改めて、宜しくお願いね」

なんでか解らないけど、自然に自分の名前を口にしていた。
今さっき、自分の名前を言ったばかりなのに、どうしてだろう…。
だけど、答えは直ぐに見つかった。
さっきのはあくまで契約としての呪文でしかなく、今はルイズと
しての自己紹介なのだ。

騎士二人は呆けた顔をして、お互いに顔を向け合わせたが直ぐにそ
れは笑に変わる。

アーチャー「私はエミヤという。これからよろしく頼むマスター^{ルイズ}」

ランサー「俺はクー・フリーンつうんだ。よろしく頼むぜ嬢ちゃん^{ルイズ}」

自分の名前が呼ばれてこんなに嬉しかったことはなかったのではな
いか。

心躍るといふのはこういうことなんだろうか。

使い魔と自分だけの騎士を手に入れたことにより、喜びで顔を綻ば
させている彼女をよそに、アーチャーは一人の男の姿を探していた。

アーチャー「(元はどこにいった?)」

元の姿はその場にはなかった。

第2話 現状確認

「オスマン…、少し老けたな」

「ホッホッホ…。30年も経ったので、じゃが…お主は変わらんのぉ。羨ましいわい」

目の前に座っている男こそが、このトリステイン魔法学院の学園長である。

周りからはオールド・オスマンの愛称で親しまれて？いる。

しかし、30年か…。

となれば、俺の知る人間も幾らか死んでしまっているだろう。

「安心しろ。今回はここで骨を埋める予定だ…、問題が無ければだがな…。こいつがな」

「そうかの。なら、今回は一緒に歳をとっていくとするかの」

「フツ…」

さて、懐かしみの再会の挨拶もこれくらいでいいだろう。

この30年間で起きたハルキゲニアの変化を聞かなくてはならない。

「それで聞きたいことがあるんだが…」

「ふむ…、本題といったところかの。それで、何が聞きたいんじや？」

一つ目は、トリステインの内状についてだ。

30年も経てば、流石に王が変わっている可能性がある。

「フィリップ三世はご健勝か？」

「実はの…フィリップ三世は崩御されたんじゃ。今は孫に当たるアンリエッタ王女が国の政務をしとる形になっておる」

「マリアンヌとその夫はどうした…」

「前国王…マリアンヌ太后のじゃが…。数年前に崩御された際に喪に服しておつての」

「マリアンヌの馬鹿は一体何を考えているんだ…、それでその王女はちゃんと王女を出来ているのか？」

問題はそこだ。

あの時出会ったマリアンヌはまだ十代半ばの生意気なガキだった。それから、30年…つまりはアンリエッタという王女もまだ少女だらう。

「アンリエッタ王女はまだ17歳の若さでの…、とても政務には…。そのせいで街の人間にはこんな小唄まで流行っておる始末じゃ」

「小唄？」

トリストインの王家には、
美貌はあっても脳が無い。
脳があるのは枢機卿。

灰色帽子の鳥の骨

「何ともまあ…、情けない話だな。それにしても鳥の骨というのは？」

「マザリーニという宰相で、先王崩御以来の政務の多くを担っている人物じゃ。元はロマニアの枢機卿での、そのため周囲からは枢機卿と呼ばれておる」

「ほお…、あのマザリーニがな」

「知っておるのか？」

30年前に会った事がある。

あの時の少年の目を今でも覚えている。

いい目をしていると思っただが、ロマリアの枢機卿にまでなり、更にはトリステインの宰相にまでなっているとはな…。

「いやはや…、30年という歳月の重みを改めて実感するよ。それで、サンドリオンとカーリーヌは元気か？ あれ程の才能だ…、随分と素晴らしいメイジになっているだろうさ」

「サンドリオ殿は…」

そうか…。

これも30年の重みというやつか。

「しかし、カーリーヴァリエールの母上じゃ」

「やはりな…。顔つき、髪の色、体型、プライドが高く負けず嫌いで臆病な性格とカーリーヌにそっくりだからな…。というか、似すぎだろ」

良いところから悪いところまで似ている。

というか、悪いところばかり似ている気がする。

…クローンか？

しかし、カリリーヌとヴァリエールが結婚したか…。

あいつ絶対に尻に敷かれてるな。

ルイズとカリリーヌの余りにも酷似した容姿、性格に内心驚きを感じているところにドアがノックされる音が鳴った。

「オールド・オスマン…、ミス・ヴァリエールとアーチャー殿、ラ
ンサー殿をお連れしました」

「おほ？ 儂は呼んどらんぞ？」

「いや、俺が使い魔の儀式が終わったら連れてくるように頼んだん
だ…。調整関係でな」

「…相分かった。 ミスタ・コルベール…」

「分かりました…。 失礼しました」

コルベール殿はオスマンの目を見て、退室した。

やはり、あの男も優秀な人間だな。

「エミヤ、クー…契約のほうはどうだった？」

「それがよお…、嬢ちゃんの手に令呪が刻まれたのは良かったんだ
が…」

「私たちの手にも何か刻まれたんだが。 …これはルーンか？」

正解だ…。

ブリミルの馬鹿が残した一つの呪いだな…。

「ルイズで良かったな？」

「そうよ…ってどうか、あなたの名前はなんていうのよ」

「っと、失礼した」

元は今まで座っていた椅子から立ち上がり、一つの礼をして自己紹

介をする。

それにしても、俺としたことが…。
人として関わりをもつための一番大切なモノを忘れるとはな、こいつがさ。

「俺の名前は神堂元…。ハルキゲニア流に言つと、ハジメ・シンドウという。君の母と父には、昔それなりに付き合いがあった」

「お父様とお母様に…？」

「ああ…、君は母親似だな。目元、体型、性格…その他諸々、あいつの生き写しだ」

「そんなに似てるの？」

気持ち悪いくらい似ているよ。

「それで、君には他に聞きたいことがあるのではないか？」

元の言葉に、ハツとした顔をして俺に両手の甲を見せてくる。
しかし、身長差が40センチ以上あるルイズと俺では明らかに高さ
が足りない。

つま先立ちで、こちらに精一杯主張する少女の姿が可愛いと思っ
てしまったのは仕方のないことだろう。

彼女の後ろでは声を殺して笑いをこらえているエミヤとクーが見え
る。

…笑ってやるなよ。

「これは何のよー！」

「これは令呪といってな、エミヤとクーを縛り付ける為に必要なものなんだ」

「令呪？」

「令呪のお…。 なら、彼らはセイバー殿と同じなのか？」

「うん？ 貴方はセイバーを知っているのか？」

「っていつか…誰だよ？」

「それは失礼したの。 儂はこのトリステイン魔法学院で学園長を勤めておるオスマンじゃ。 お会いできて光栄の極みじゃ…英霊殿」

「英霊…？」

エミヤとクーは俺の顔を見ってくる。

恐らくは、何故アルトリアを知っているのか、何故英霊と知っているのかという所だろう。

「どついう事だ…元？」

「かつて、俺がこの世界に来たことがあるとは言ったな？ その時、アルトリアも一緒にいた…つまりはそういうことだ」

魔法が一般となっている、更には異世界だ。

そんな状況で、よっぽどの事でなければ神秘の隠匿など必要もないだろう。

「ちょっと、勝手に話を進めないでよ！」

「失礼した。だが、今ちゃんと教えてやる」

そう言つて、俺は念力で椅子を三つ動かして彼女達の前に動かす。

「今の念力？ でも、杖を使わないで…」

この世界の魔法使いは魔法の行使の媒体として杖を使っている。

そのサイズは等身大のものから、10 سانت程度のものまで多岐にわたる。

そして、この世界において杖なしの魔法の行使はとある意味を持っている。

「まあ、座れ。少し話が長くなる」

ルイズはオスマンの顔を見る。

その顔は少し不安そうではあるが、オスマンは優しい笑顔でルイズに座るように促した。

ルイズは渋々、椅子に座る。

「さて、何から話そうか…。まずは俺たちについて話そうか」

「まず、最初に俺達はこの世界の人間ではない。　　というか、人間ですらない」

それを聞いて、ルイズは「何言ってるんだこいつ」といった顔をして俺を見る。

その目は痛い人を見る目だった。

おい、ちよつと待て。

何でオスマンまでそんな目をするんだ。

「ノリじゃよ」

死ねばいいのに。

「ミス・ヴァリエール…、彼の言っていることは本当じゃよ。　　儂は現に30年前に彼に会っておる」

「さ、30年前!?　　嘘、だって、こいつ…こんなに…」

「若く見えるか?　　だとしたら、君の目は正常だ。　　俺の肉体年齢

は現在26歳になっているからな…まあ、ここから歳をとっていくわけだから30年後は56の爺だな」

「どづいうこと？」

「俺のことを説明するのは、結構面倒だからな。その機会はまたの今度におこう。今は君の手に刻まれた令呪について説明するでしょう」

俺のことを置いておかれたことに少し不満そうだが、今自分の身に起こった

ことが気になるのか、渋々ながら納得してくれた。

「そうよ、その令呪ってのはなんなのよ？」

「令呪は俺の世界で行われた魔術儀式のシステムの一部で英霊を使い魔として縛り付けるために必要なものだ」

「魔術儀式？ 英霊？」

その魔術儀式の名前は聖杯戦争。

あらゆる願いを叶えるという聖杯を手に入れる為に、聖杯に選ばれた七組の魔術師と英霊マスターがその技を競い合い、殺し合う。サーヴァント

そして、英霊。

生前偉大な功績を上げた英雄が死後に信仰の対象となったもので分類としては精霊に近い。

このハルキゲニアで言うならば、イーヴァルディがそれに当たるだろう。

「そして、君の使い魔となったクーとエミヤがその英霊だ」

「せ、精霊様なの!？」

それを聞いて、エミヤとクーは苦笑している。

「精霊と言っても、やっていることは殺し合いの道具に過ぎないしな」

「それに本来の御三家の目的は聖杯そのものですらない」

「どういうこと?」

本来の目的は、サーヴァントとして召喚した英霊の魂が座に戻る際に生じる孔を固定してそこから外へ出る事なので、本当は殺し合いなどする必要は無いのだ。

ただ、その本来の目的を隠す必要がある、更にはマスターとなる魔術師を呼び出す餌として表向きの聖杯戦争があったのだ。

それを聞いて、ルイズは憤慨していた。

死んだ人の霊に殺し合わせてもう一度死なせた上、その霊を利用して自分の願いを叶えるなんて、誇り高いメイジのやることか。

気に入らなかった。

「まあ、それが聖杯戦争と英霊だ。次は令呪の説明だな。先も言った通り、英霊というのは一人の人間が御することなど不可能な存在だ。何故なら、かつての英雄そのものなのだからな」

「って、ことは…。エミヤとクーって幽霊なの?」

「幽霊つて…それは随分じゃねえか？」

「うむ…。先ほど元が言っていた通り、私たちはどちらかと言うと精霊に近い存在だ。そのような霊格の低い存在と一緒にしないで欲しい」

「フフ…、まあそういうことだ。簡単に言うと、高々人間ごときが精霊を御することなど不可能ということだ。それ故に、聖杯戦争の御三家の一角は令呪というシステムを作った」

「だから、令呪ってなんなのよ」

「マスター…、令呪とは絶対命令権をもってサーヴァントを従わせる事を可能とするものであり、マスターとしての証だ」

「本来の令呪であれば、それこそ魔法地味な命令も可能なんだが、現在は不可能だ」

理由はただ単にこの世界に聖杯がないためである。本来の令呪ならば、その三角ある印の一角一角に膨大な魔力があるのだが、今回はあくまで形だけを持ってきたのだ。最低限の使い魔として、命令をきく程度の…。それ故にある意味、令呪とは言えないのかもしれない。

「何となくは分かったわ」

「僕は全然わからん」

ルイズは優秀のようだ。

しかし、オスマンよ…貴様には30年前も同じことを言っているは

ずだが？

あれか、痴呆でも始まったか？

「それでだ…、本来彼等英霊は霊体なのだが、ここでは受肉しているため君の負担にはなりはしない」

「どういこと？」

「私たち英霊は本来、その存在を維持するためにマスターの魔力が必要となる。しかし、今回はどういう訳か（元のせい）受肉しているため、君にかかる負担はゼロだと思ってくれて構わない」

「ラッキーだな嬢ちゃん。俺たちが受肉してなかったら、契約した途端パタツと死んでも可笑しくないんだぜ？」

それを聞いて、私は血の気が引いたのが解った。

でも、考えてみたらソレは当たり前のことだろう。

仮りに、この二人は精霊様なのだ。

そんな二人を私だけの魔力で維持なんか出来ない。

「まあ、そんな訳だ。魔法の行使も気にする必要はない、安心して」

それを聞いて、一瞬安心したが、心えぐられた。

このハジメという男には悪意は全くないのだろう。

というか、異世界から来たと言っている男が私がゼロと呼ばれていることを知っているはずがない。

「……」

「…？」

一体どうしたというのだ？

俺の疑問の原因を知っているのか、オスマンはその答えを知っているのか、悲しそうな顔をしている。

「そういえばよ、なんで俺たちにも令呪みてえのが刻まれてるんだ？」

そんな俺の心中をよそに、クーは左手に刻まれているルーンをポリポリと搔いている。

だが、その疑問はエミヤも同じのようで左手のルーンを気にしているようだ。

「それは使い魔のルーンじゃよ」

「使い魔のルーンとは？」

「サモン・サーヴァントで呼び出された使い魔に刻まれるものだ。そのルーンによって、使い魔に特殊能力が与えられることもある」

「特殊能力…？」

「例えば、猫や鳥が喋るとか…そういうことだ。　そういえば、お前らの腕にはどんなルーンが刻まれたんだ？」

「それがよ、気に食わねえことに…いっと同じなんだ」

「それは私も同感だ」

そんな彼等のやり取りに苦笑してしまう。
仲が良いのか、悪いのか…。
そんな中、二人にルーンを見せてもらった。

「…!？」

「どうしたのよ？」

このルーンは…。

顔を強ばらした俺に、疑問の言葉を投げかけるルイズの顔を見る。
まさか…、この少女は…。

「本当にどうしたのよ」

だが、ならば彼女は俺とも契約を結べるかもしれん。

「いや、何でもない…。あまり見たことのない形だったのにな」

「ふ〜ん…」

先とは一転して、俺の疑問がどうでもいいように鼻をならした。
もし、彼女が本当にアイツと同じならば、ガリアやロマリア、アル
ピオンにも…。
なるほど、調整者が呼ばれるに相応しいといったところか。

「さて、シンドウよ…話は終わったかの？」

「…っつと」

だが、まだ確証はない。

俺の思い違いの可能性もある。
今は下手に話す必要はないか…。

「ああ、俺の方は大丈夫だ。 ルイズはもう聞きたいことは無いか？」

「うん…。 何となく引つかかるけど、取り敢えず今は大丈夫よ」

「もし、気になることがあればその時は聞いてくれ」

「分かったわ」

かなりデカイ疑問が残ったが、今は保留しかないか。
だが、いずれ遠くない先に解るだろう。

「エミヤ殿とクー殿は大丈夫かの？」

「私は問題ない」

「ああ俺もだ」

「なら、次は部屋の話でもするかの」

部屋の話？

「どういうことですか？ オールド・オスマン」

「実は今、部屋の空きがないんじゃ」

「「「「はっ？」」」」

「じゃから、暫くはミス・ヴァリエールの部屋で暮らして欲しいんじゃ。直ぐに部屋を調達する…、じゃから、少しの間我慢して欲しいんじゃ」

「…仕方ないわよね」

「まあ、仕方ねえな」

「ふむ…年頃の少女の部屋に押しかける形になるのは心もとないのだが」

「オスマン…、学院で働いている人間も空いてないのか？」

「いや、そこは空いてるんじゃが…。そこも一部屋しか空いてないんじゃ。それも、余り広い部屋じゃないんじゃよ」

「なら、俺はそこで構わない。エミヤとクーは使い魔なのだから、マスターから離れる訳にもいかんだろうさ」

「じゃが…「オスマン」なんじゃ？」

貴様は一つ忘れてるぞ。

「俺が平民とか貴族とかを気にするような人間だったか？」

「…！ そっじゃったの。なら、お願いできるかの？」

ハジメは気にするなと、言って椅子から立ち上がった。

つまりは、そこで話は終了ということだ。

それを見て、エミヤとクーも椅子から立ち上がり、ドアに向かった。ルイズは慌てて、椅子から立ち上がり、オスマンに一礼して同じくドアに向かった。

「それではな、失礼した」

「またの…」

元達は背にその言葉を聞きながら、部屋を出た。

ルイズはというと、最後まで彼等に振り回される形であった。

一人学園長室に残されたオスマンは眉間にシワを寄せ、小さく呟いた。

「調整者…。 また、ひと悶着ありそうなのだ…」

小さく軋みを上げていた運命の歯車が今噛み合い、回り始めた。

第3話 朝の一幕…涙

学園長室を後にした後、ルイズ達は教室に向かい、俺は自分の部屋を確保する為の行動にでた。

「…さて、ルイズが授業をしている間にやっておくか」

ここトリスティン魔法学院で働いている人間は教師を除けば、殆ど全員平民である。

その理由は簡単である。

この世界では平民は貴族に仕えるべき存在としてのみ存在していると言ってもいい扱いを受けている。

領主である貴族は領民である平民から税を搾取し、彼らをモノのように扱う。

非合法ではあるが、奴隷館なども存在し、一部の貴族はそれを商業の一部としているくらいである。

例えば、道を歩いていたら拐われる…なんてことも極論ではあるが現実として起こっている。

そして、平民はそれをした貴族に逆らってはいけない…逆らえないのだ。

逆らったら最期であるからだ。

反吐が出る…。

ここで働いているメイド長の人間を探しているのだが、如何せん顔が解らない。

先ほどから視界にはいる平民の人たちに、その人物の居場所まで案内してもらえれば良いのだが、彼女達は働いているのだ。

無闇に声をかけるのは申し訳ない。

「もし…貴族様？」

歩いていると、一人の少女に声をかけられた。

フラフラと歩いていた性で不審者に思われたのかと思ったが、そうではないらしい。

貴族と呼ばれたため、俺が何か困っているのかと思ったのだろう。

「君は…、ここで働いている者だね？」

「はい。メイドをさせてもらってますシエスタといいます。貴族様にお声をおかけするのは失礼かと思いましたが、何やらお困りのようでしたので…」

「そうか、俺はハジメ・シンドウという」

どうやら、彼女は俺のことを貴族だと思っているのだろう。

勿論、制服を着ていないし、そんな年齢でもないため来訪者の一人だと思ったのか、彼女は必要以上の敬語を使ってきた。

「すまないが、私は貴族ではないんだ」

「そうなんですか？ …もしかして、ミズ・ヴァリエールの使い魔様であられますか？」

「必要以上の敬語は必要ないよ…。それにしても、もう噂が広がってるのか？」

「いえ、まだそれ程広まっている訳ではありませんが、貴族の方々が噂をしているのを耳にしまして…」

ふむ…、当日でこの有様か。

この分だと、明日には学園中に広まっているな。

「そうか…、それで間違いはない。間違いなく俺は彼女に召喚された者だ」

使い魔ではないがな…。

だが、もし彼女がアイツと同じ系統ならば、契約可能かもしれんな。

「そうですね、それは大変でしたね」

シエスタという少女は手を口に当てて、小さく微笑んだ。

その姿は正に美少女に相応しいものだった。

彼女の容姿はルイズのような…所謂可憐なものではないが、日本人の女性のような大和撫子のような美しさをもっていた。

髪は黒髪のやや長めのポブカット、肌は日本人のような肌色に黒色の瞳である。

「実は、少し困っているんだ」

「どうなさったんですか？」

「ルイズに召喚されたはいいんだが…、如何せん一部屋に4人が住めるほどの広さはない。それ故に、俺は君たちが使っている部屋の空きで暫く過ごすことになったんだが…。そこの責任者を探してるんだ、今どこにいるか分かるか？」

俺の言葉に彼女は少し驚いているようだ。
ソレは俺が平民の部屋に住むこともそうだが、ルイズと呼び捨てにしていることも驚きの原因であろう。

もし、平民がそのような口を貴族に使おうものなら、その場で殺されても文句は言えないのだ。

「そうですか…。 わかりました、私が今案内しますね」

「良いのか？ 仕事中だろう？ 場所さえ、教えて貰えば自分で行けるんだが…」

「丁度時間が空いたところなんです…。 ですから大丈夫ですよ」

実に有難いことだ。

平民ゆえに貴族から受けている仕打ちを知っている。

だから、他人には優しくできることもあるろう。

だが、恐らくこれは彼女が最初からもっているモノなのだろう…。

俺は彼女の申し出を有り難く受け、責任者の下に案内してもらおうことにした。

歩いている途中はなんてことのない他愛の無い話をしていた。

彼女の故郷の村の事、俺の故郷のことなど…。

話をしているうちに、妙齡の女性の下に案内された。

どうやら、彼女がメイド長なのだろう。

「初めまして、暫くお世話になります。 ハジメ・シンドウです」

俺は一礼して、自己紹介をする。

それを見て、メイド長と思われる女性は優しい笑顔で一礼してくれた。

そして、シエスタとは別れ、部屋に案内されたのだが、実に身分の格差を感じられる部屋であった。

まだ、生徒の部屋を見たことはないが、恐らくは此処などより遥かに豪華に造られているのだろう。

この部屋には、ベッドと小さな棚位しかない。

実に質素と言えるだろう。

だが、寝食をするには十分だ。

雨風を防いでくれれば、そこは楽園である。

「それでは私は仕事がありますので、ここで失礼します」

「いえ、わざわざ案内していただき有難うございます」

「何か困った事がありましたら、お気にせずお声をかけてください」

そう言っつて、彼女は一礼して仕事に戻っていった。

俺は部屋にあるベッドに腰を下ろし、外套を脱ぎ一息つくことにした。

創造でタバコを創り、魔術で火を付け口に運ぶ。

首の骨を鳴らし、ベッドに横たわる。

「ふう…」

さて、これからどうするか…。

まずは、ここトリストイン魔法学院を中心に活動することは決定だ。下手に動き回るよりは、情報が定期的に入って来る此処にいるほう

が良いだろう。

恐らくは彼女…ルイズがこの世界の中心となることは決定だろう。その理由は、エミヤとクーに刻まれたルーンと俺たちが彼女に召喚された事という事実である。

恐らく、あのルーンは“ガンダールヴ”だ。

あの馬鹿の使い魔だった彼女も同じルーンをしていたはずだ。

そして、俺が呼び出されたことを当てはめると他にも担い手が存在するはずだ。

「“虚無”か…」

ハッキリ言って、あれは反則だ。

俺たち魔術師にとっての魔法を全部集めたようなモノだ。

下手をすれば、“魔法”などよりずっとタチが悪い。

「もし、ルイズが虚無の担い手だとすれば…」

思考に耽っている中で、俺の記憶は途切れた。

「……寝てしまったか」

気が付けば、朝だった。

体を起こし、軽く体を伸ばし、部屋を出ることにした。

ドアを開ける際に噛み合わせが悪いのか、ドアが軋みを上げていた。ふと視線をずらすと、足元にはお盆に乗せられていたパンとシチューが乗せられていた。

シチューの冷め具合を見るに、恐らくは夜飯として用意してくれたんだろう。

だが、俺が寝てしまっていたためメイドがドアの前に置いといてくれた…。

そんな事だろう。

冷めているとは言え、折角用意してくれたものだ。

夜飯を食べないで眠ってしまったせいかわ、小腹が空いている。

お盆を持って、部屋に戻りパンとシチューに口をつける。

「…パンはあれだが、シチューは美味しいな」

冷めても美味しかった。

余程腕の良いコックがいるのだろう。

それを思うと、温かい状態のシチューはどれ程美味しいのか気になっ

た。
少し、自己嫌悪だ…。

朝食と言っているのか解らないが、朝食を済ませお盆を返しに厨房に向かうことにした。

だが、朝の日差しを浴びるために一度外に出ることにした。

恐らくはまだ早朝なのだろうが、メイドの人たちは忙しそうに働いている。

彼女たちに労働基準法を説いてみようか。

などと下らないことを考えながら歩いていると、昨日出会ったシエスタが洗濯をしていた。

昨日のお礼と朝の挨拶をするため、彼女に声をかけた。

「シエスタ、おはよう」

「え…あ、おはようございます。 ゆっくり眠れましたか？」

「ああ、もしかしてコレは君が持ってきてくれたのか？」

「はい。 お眠りになられてたみたいだったので、部屋の前に置いておいたんですが…」

「有難う…。 美味しかったよ」

「ふふふ…、それはマルトーさんに言われたほうが喜びますよ」

「マルトー…これを作ったコックか？」

「はい。貴族の方々に出す料理のまかないですが」

お盆と食器を返すついでに、お礼を言った方がよさそうだな…。

「…で、お前たちは何をしてるんだ？」

視線を下にずらすとそこでは英霊二人が、洗濯をしていた。
英霊が洗濯って…。

「嬢ちゃんが洗っとけてよ…」

「そうか…。まあ、エミヤは良いとして「どういう意味だ！」うん？ 貴様は家政婦だろう？」

「バトラーと呼べ」

そのこだわりは未だにあるのか…。

だが、クーは兎も角エミヤは似合いすぎではないか？
やはり、家政婦だろうと思ってしまうたのは内緒である。

「まあ良い…。俺はこれから、コイツを返しに厨房に行くがお前たちはこの後、どうするんだ？」

「私たちはこの後、マスターを起こしてからだが…」

「忘れていたかもしれんが、お前らは今肉体があるんだぞ？ 飯はどうするんだ？」

「「あ…」」

「どうやら、忘れていたらしい。」

「シエスタは俺が何を言っているのか解らないようすで、首を傾げている。」

「ふむ、可愛らしいじゃないか…。」

「ルイズがその辺に気が回るとは思わんし、オスマンも恐らく忘れていたろう…、ついでに厨房で交渉してくる。」

「すまねえな。」

「私たちも礼も後で行く。」

「了解した…。それじゃあ、こいつ等をよろしく頼む。また後でなシエスタ。」

「あ、はい。」

シエスタに声をかけ、俺は厨房に向かった。

厨房では料理人の方々が忙しく動き回っている。
どこかの誰かが、厨房は戦場だ…みたいなことを言っていた気がしたが、納得だ。

「スイマセン」

厨房にいる人に声をかけると、立派な帽子をかぶった中年の男性が近づいてきた。

その帽子を見るに、彼がコック長だと思われる。

昨日のことと、自分のことを簡単に説明すると、最初の畏まった態度が一転して気さくに話しかけてくれた。

「昨晩はわざわざ自分の分の料理まで用意していただき、有難うございました」

「良いつてことよ」

「とても美味しかったです」

「それは何よりだ」

「それでなんです…」

「どうしたんだ？」

「忙しい中、申し訳ないんですが自分の分ともう2人分の朝食も用意していただけませんか？」

「それまたどうして？」

俺の他にも召喚された人間が2人いることをマルトー氏に説明した。それを聞いたマルトー氏の反応を見るに、やはり聞かされてなかったようだ。

言っておいて、正解だな。

「それは構わねえよ」

「有難うございます。後でその2人と再びお礼に参りますので」

「気にすんな。同じ平民同士、仲良くしようじゃねえか」

気持ちの良いくらいに豪快に笑って承諾してくれた。

昨日のメイド長といい、マルトー氏といい、シエスタといい…いい人たちが集まっているな。

そこはオスマンが平民と貴族を区別するような人間ではなかったためである。

「有難うございます。それではまた後ほど…」

そうして、俺は厨房を後にしてルイズの部屋に向かった。

場所は偶々歩いていた女性の教員と思われる人に道を聞いた。

昨日の出来事を知っていたようで、俺の姿を見るや納得してくれたみたいだ。

とても、この近くで見るとような服装では無いからな。

教えて貰ったルイズの部屋に向かうため、女子寮に入らなくてはいけないのだが、少し緊張する。

道行く、女生徒に怪訝な目で見られながら、ルイズの部屋に向かって歩いている。

歩いていると、部屋の前にクーとエミヤが立っていた。

「何をしてるんだ？」

「ああ…、元か。今中でマスターが着替えてるんだよ」

「それは、アレだな…」

「まあな…。そういや、朝飯の件はどうなった？」

「問題ないそうだが…。だが、やはり聞かされてなかったようではあつたがな」

それを聞いて、エミヤとクーは深くため息を漏らした。使い魔の食事を用意するのも主の勤めなんだがな…。

「それは後で礼を言いに行かなくてはな」

「そうしとけ…。俺も後で行くつもりだからな」

そんなことを話していると隣から一人の生徒が出てきた。

「あら？ あなた達はルイズに召喚された人達ね？」

褐色の肌の彼女はルイズなどとは比べ物にならない程の女だった。どういう意味かって？ そのまんまの意味だ。

「失礼、君は？ 俺の名前はハジメ・シンドウという」

「私はエミヤ……。ルイズに召喚された者だ」

「同じく、俺はクー・フリーンってんだ。宜しく頼むぜ姉ちゃん」

「私は「待たせたわね……ってゲツ！」おはようルイズ。それにしても朝の挨拶がゲツはひどくない？」

「そつだぞマスター。朝の挨拶は一日を始めるのに重要なモノだ。それに……」

ルイズのゲツにエミヤは母親のように朝の挨拶の大切さを説いていく。

それを聞いてルイズは辟易している。

確かに朝一番にエミヤの皮肉たっぷり説教は堪えるだろう。だが、褐色の肌の女生徒はその光景を見て微笑んでいる。

「そこまでにしておけエミヤ」

「ぬ……しかし」

「ルイズを見る」

そう言って、俺はルイズの小さな頭を体の前に引っ張りだす。

その顔は何とも言えない渋いものだった。
それを見て、エミヤは言い詰まったような顔をした。

「それで、君はルイズの友人で良いんだな？」

「そうね「そんな訳ないじゃない！」あらあら……」

どうやら、意見の食い違いがあるようだ。

彼女の足元では使い魔のサラマンダーが下をチュルチュルと出しながら、その光景を見ている。

「どうということだ？」

ルイズは拳を握り締め、ズカズカと一人で食堂に歩いていった。

どうでも良いが、ルイズよ……。

女性ががに股で歩くのはどうかと思うぞ？

「行ってしまったか……」

「はあ……」

彼女はルイズの後ろ姿を見つめながら、深くため息を吐いた。

全くもって、同感だ。

俺たちも同じく、深いため息が出ってしまった。

「まあ、ルイズのことは置いていて、自己紹介の続きといこうか」

「そうね。私の名前はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォ

ン・アンハルツ・ツエルプストーよ。呼ぶときはキュルケでいい

わ。よろしくね騎士様方」

どうやら、彼女は昨日の広場にいたようだ。
ということは、彼女もルイズと同じ学年ということか…。
流石に同じ歳ということはないだろうが…。

「よろしく頼むぜ、キュルケ…。それにしても、うちのマスターと違って随分と女っぽいんだな」

「…ランサー。それはマスターの前では言うなよ。マスターも気にしてるらしく、昨日も一人で静かに豊胸マッサージをしてたくらいだ」

「……」「……」

その姿を4人で思い浮かべてしまった。
思わず、涙が出てしまった。

「そうね…。言わないほうがいいわね」

「だな……」

「豊胸マッサージなど、意味が無いというのにな……」

「あら、そうなの?」

実はそうなのだ。

よく揉めば大きくなると言われているが、実際は逆効果なのだ。

「胸は脂肪だから…。むしろ揉むという行為は脂肪を燃焼する運動になり、逆に小さくなる可能性がある。そして、胸の形を維

持する筋肉も切れて将来、胸の形が崩れる危険性もある。上がるのは感度だけだ」

「……」

全員が黙った。

どうしたというのだろうか？

「オメエ…、何でそんな詳しいんだ？」

「（コクコク）」

どうやら、そういうことらしい。

つまりは、男がそんなことを知っているのは気持ちが悪いのだろう。だが、理由がある。

「キュルケは知らないと思うが、俺の知り合いに胸を気にする女性が2人いてな。その2人も必死にマツサージを隠れてしてたんだが、まるつきり効果が無かったんだ」

「元…、その2人というのはまさか…」

エミヤの思っているとおり、凜とアルトリアだ。

凜は桜の胸に嫉妬し、アルトリアはメドゥーサの胸に嫉妬していた。しかし、凜の想いは解る。

だが、アルトリアよ…お前は英霊なのだから、幾ら頑張ろうと減りも増えもしないのだぞ。

俺がその光景を目にしたときは、一人隠れて涙を流したものだ。

「まあ、そんな訳で多少は胸を大きくする方法を知っている訳だ」

「その方法をルイズに教えてあげたら？」

考えておこう…。

というか、教えてあげよう。

しかし、カリィヌの娘だし…。

「まあいいや。取り敢えず、食堂にいかねえか？ 流石に腹が減ってきた」

「っと、そうだな」

「マスターもお冠だろう…」

「そうね、せつかくの料理が冷えたら勿体無いしね」

「全くだ…」

そうして、涙を少し流すというある意味衝撃的な朝を迎えた俺達は食堂に向かった。

だが、やはりルイズも女性だということなのだな。

「それはもういい」

エミヤに突っ込みを受けてしまった。

憂鬱だ…。

第3話 朝の一幕…涙（後書き）

いい感じに元が俗世にまみれてますかね？

でも、少し軟派にしてしまった気がする…。
反省はしないがな！

第4話 ゼロとルイズ

食堂についた。

トリステイン魔法学院の食堂は、学院の敷地内で一番背の高い本塔にある。

食堂の中は、やたらと長いテーブルが三つ並んでおり、一つには軽く百人は座れるだろう。

今年で二年生になったルイズたちのテーブルは、真ん中である。

食堂の正面に向かって左隣のテーブルに並んだ、メイジたちは皆紫色のマントを、そして反対の右隣のテーブルのメイジたちは茶色のマントを身につけている。

マントの色で学年を分けており、識別できるのだ。

エミヤとクローは食堂の広さに驚いている。

それもそうだろう…、この食堂では学院の生徒が一同に会し食事を
する場所なのだ。

それにしても、無駄に広い。

「学院が教えるのは、魔法だけじゃないのよ」

そついう人は、ルイズの隣人であるキュルケである。

聞けば、ルイズより二つ年上であるとのことだが、それにしても…。
ルイズが可哀想に見えてくる。

「メイジはほぼ全員が貴族なの。“貴族は魔法をもってしてその精神となす”をモットーに貴族たるべき教育を、存分に受けるのよ。

だから食堂も、貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬのよ」

そういう彼女はとて不機嫌そうな顔をしているルイズだ。その理由は俺達がキュルケと話をしているからだろう。何故、こんなにもルイズは彼女を嫌うのか？

とはいえ、見当は付いている。

全く、家の問題を子供たちに押しつけないで欲しい。

「マスター」

「何？」

「私たちの食事は？」

「あつ…」

「やはり、忘れてたか…」

どうやら、エミヤがルイズを弄っている。

全く、彼女が忘れていたのはとうに知っているだろうに…。

「な何よ、もも勿論忘れてるわけじゃない」

「ふむ…、では私たちはどうすればいいのだろうか…マスター？」

「ククククク…」

ルイズは慌てすぎて、もはや口調が噛み噛みである。

そんな所まで、カーリー又に似なくてもいいだろうに…。

だが、相対してエミヤはルイズを弄るのにとてもしそんな顔をしている。

凜の代わりでも見つけたか？

クーよ…必死に笑いをこらえようとしているみたいだが、声が漏れてるぞ。

「そこまでにしておけ、エミヤ。あまり、ルイズを苛めてやるな」

「クツ」

「ハア―ハツハハ―！」

「な、何よ…！」

「ルイズ、俺達は厨房に頼んで料理を用意してもらっている」

それを聞いて、ルイズはようやく自分が弄られていたことに気づいたのか、顔を赤くしてプルプルと震え出した。

あー…、あれはまずい。

あれはカーリーヌが切れ出す直前の合図と同じだ。

エミヤも気づいたのだろう。

恐らくは、あいつも凜を弄りすぎて同じものを見たのだろう。

ルイズの周りにいた生徒たちも冷や汗を流しながら、少しずつ後ろを去りしていく。

しかし、クーだけはそれに気づかず未だに馬鹿笑いをしている。

あゝ…死んだな。

「ヒィーヒツヒヒ…、あゝ腹が「こ…」…ってあれ？」

「こっこ、この、バカ犬ううう…！」

「ぎゃあああああ!!」

巨大な爆発が食堂の一部分のみを襲った。

負傷者0名。

死亡者1名。

という、形で惨劇は終わった。

「いや、死んでねえから!」

「このバカ犬うう!!」

「犬って言うな! ってぎゃあああ!!」

さて、食事も終わり俺達は今、ルイズと共に教室に向かっているわけだが。

勿論、厨房のコックの方々にはお礼を言った。

それにしてもエミヤがとても褒めていた。

曰く、雑に作られてはいるが、それでも食べるものへの心遣いが感じられたらしい。

料理のことはそれ程詳しくはないが、それには同感だ。

「クー、まだ痛むか？」

「まったく、あの嬢ちゃんの魔法はどうかしてるぜ。俺の対魔力がきかねえってどういうことだよ」

「ふむ…、それは私も気になっていた。オド、マナに限らず魔術ならば私たちサーヴァントの対魔力ならば大抵の魔術は無効化されるはずなのだが…」

やはり、彼女は担い手か…。

確定するのは、早いかもしれんが…。

いや、でなければエミヤ達にあのルーンが現れることもないし、サーヴァントの対魔力を無効化出来るはずもない。

だが、今は置いておこう…。

教室に入ると教室にいた生徒達は私たちを見る途端にざわめきだした。

ルイズの話によると私はずいぶん噂になっているらしいのだ。

使い魔が人間というのもあるが、俺が思うに先程の爆発事件もその要因であろう。

教室を見渡すとキュルケがいた。
魅力的な容姿をもつ彼女のことだ。
それなりに遊んでいるのだろう…、彼女の周りは男子が取り囲んで
いる。

「それにしても、幻想種が随分といやがる」

クーの言うとおり、この教室には普通の世界では見ることができな
いような生物が大量にいる。

その全てがメイジの使い魔なわけだ。

キュルケのサラマンダーもそうなのだが、この世界は幻想種に対し
ての扱いがあまりにも軽い。

それも異世界故なのだが、エミヤは未だに渋い顔をしている。

俺たちの世界では、存在を確認できただけでも大騒ぎになるとい
う代物があるわけだから、それも当然と言えば当然だ。

俺も調整をしていく上で、これ程までに幻想種の扱いが軽い世界と
いうのを見たことはない。

最初、この世界に来たときは俺もかなり驚いた記憶がある。

ルイズは席に座り、俺達は教室の後ろに控える。

その光景はまるで、生徒たちを監視するソレに似ている。

大の大人が3人も子供たちに混じっているのだ。

その光景は実に滑稽だろう。

暫くすると、先生らしき婦人が現れた。

あの女性はルイズの部屋を教えてくれた人だった。

「しぎげんよう、皆さん。春の使い魔召喚は成功したようですね。

このシュヴルーズ、春の新学期に皆さんの使い魔を見るのが楽しみなんですよ」

彼女はシュヴールズ女史というらしい。

視線が合ったため、今朝の件も合わせて軽く会釈した。

すると、向こうも会釈で返してくれた。

それには、驚いた。

無視されると思ったからだ。

メイジの大半が平民を見下す傾向にあるというのに、彼女はそこまで酷くは無かった。

これもオスマンの人柄故かな…。

「ミセス・ヴァリエールは随分と珍しい使い魔を召喚したようですね」

彼女に嫌味は無いのだろうか…、

「ゼロのルイズ、召喚できなかったからって平民連れてきちゃダメだろ…！」

「違うわ！ちゃんと召喚したのにコイツ等が来ちゃっただけよ！」

「嘘つくな。“サモン・サーヴァント”ができなくて、その平民に来てもらったただけだろう？」

ほら見たことか…。

馬鹿なガキというのは、常に自分より弱い存在を探している。

この世界においては、平民とルイズが当たるのだろう。

周りの生徒たちの間では、大きなお笑いが起きている。
キュルケは子供を見るような目で周りの男子たちを見ている。
その隣の水色髪のショートヘアの少女は静かに本を呼んでいる。
まるで、我関せずである。

エミヤはやれやれと言った感じで呆れており、クーは自分のマスタ
ーを侮辱されたことで、かなり苛立っているようだ。

俺が視線で抑えるように訴えかけ形でようやく収まっていると言っ
た感じである。

「ミセス・シュヴルーズ！ かぜっぴきのマリコルヌが私を侮辱し
ました！」

「かぜっぴきだと！ 僕は風上のマリコルヌだ！」

「アンタのそのガラガラ声は風邪でも引いてるみたいなのよ！」

なるほど…、確かにこの豚の声は風邪でも引いているように見事な
ガラガラ声だ。

風上よりもかぜっぴきの方がピッタリだろう。

ルイズはネーミングセンスがいいようだ。

つい笑ってしまふ。

それを聞いて、エミヤとクーも笑っているようだ。

すると、それに気づいた豚少年がこちらを睨んだ。

「おい、平民！！ お前今笑っただろ！ 平民の分際でよくも僕を
笑っただな！」

その声で今まで笑っていた生徒たちは一気に静まり返った。
やれやれ…。

「ルイズよ、君のネーミングセンスは最高だな…。よく相手の特徴を捉えてある」

「そ、そう?」

「全くだ、俺じゃあその渾名はでねえ」

「フツ…、俺なら豚足と渾名を付けてしまいそうだが…。安易に見た目からではなく、声を取り上げる辺りのセンスの良さに脱帽だ」
ルイズは自分のネーミングセンスを褒められて、嬉しそうにデヘデヘ笑いをしている。

…女の子として、その笑い方はどうかと思うぞ。

そんな思いとは別に、俺達は豚少年の言葉を無視して罵倒を続ける。

「おい！無視するな！！」

「はあ…、全くなんだというのだ？ かぜっぴき君?」

「風上だ！」

「いや、君にその二つ名は合わない。かぜっぴきの方が似合うのではないかね?」

「全くだ。それでどうした、かぜっぴき? 俺達はお前と話なんかしたくはねえんだが」

あくまで俺たちがすることは相手を馬鹿にすることだけ。
ルイズをバカにした相手だ…、というか典型的なダメな貴族相手に

遠慮など要らないだろう？

とは言え、先ほど褒められたルイズはほうけている。

ここまで、貴族が馬鹿にされているのを見たことが無いからだろう。

「かぜつぴき、かぜつぴきと…お前たち、貴族をバカにしてるだろ！ 平民がそんな態度とつていいと思ってるのか！？」

「ふむ…そもそも私たちは君などのことを貴族と認めた訳ではないのだが…」

「いやいや、エミヤよ。いくらこの少年が人間よりも豚に近いからと言って、それは無いだろう。仮にも立派な貴族様なんだからな」

「そうだ…つて、誰が豚だ！」

「あん？ そんなのテメエに決まってるだろ？ 分かりきったことを耳が腐るような声で聞くな…」

「ちょ、ちよつと…」

「き、貴様ら…！」

ルイズがアタフタしながら、こちらを諫めるようにしているが、そんな事では止まらんぞ？

「フツ…。まあ俺も初めて、コイツ等のような貴族を目にした瞬間、我が目を疑ったんだがな」

「確かにな…。俺の知っている貴族は相手の立場を貶め、あざ笑

うような奴はいなかったな…。そんなのはあの金ぴか野郎で十分だ」

「ランサーよ、君が言うと言説力があるな」

「全くだな…。中には貴族らしい人間もいるようだが、この教室の大半が貴様と似たような人間だとはな…。時が経とうと変わらん」

俺は一部のマトモな生徒達を見ながら、吐き捨てるように言葉を投げかけた。

それを聞いて、大半の生徒は俺たちの発言に憤っているようだ。中には自分のした行動を恥じている者もいるようだ。

まだ、救いようがあるな…。

ルイズはというと、まるで終わったというような顔をしている。それはキュルケも同じだ。

だが、その隣に座っている少女は先ほどから本のページをめくる以外の動作をしていない。

ここまでマイペースだと、感心しかできない。

「き、貴様等！　そこまで言うのなら…！」

「おやめなさい…！」

豚がなにか言おうとしたが、シュヴルーズ女史がそれを止める。

豚はまだ何か言いたそうにしていたが、黙って席に着いた。

しかし、ルイズは未だに体が固まったように椅子に座っている…というか動いていない。

よほど、シヨックな光景だったのだろうか？

「ミスタ・マリコルヌ、確かに今のあなたは貴族らしくありません。彼が言ったことを反省しなさい」

豚はこちらを苛立ちと憎しみをこめた目で睨みつけたが、そよ風にすら劣る。

シユヴルーズはこちらに向き合い、謝罪の言葉を並べた。

「私の生徒が、失礼を致しました」

素直に謝られてはこちらも応じない訳にはいかない。

「私としてもマスターの侮辱を見過ごせなかったとは言え、こちらも大人気なかった」

「ミセス・シユヴルーズ…、授業を中断するようなマネをして申し訳なかった」

「まあ、俺はただムカついただけなんだけどな」

「「「「」」」」」

「フンッ！」

「ぎゃっ！ー！」

元は何処からか（創造で創った）取り出した小石をランサーの頭に向けて、投げつけた。

短い悲鳴を上げ、その場に倒れ込むランサーを他所に原因である元は話を続ける。

「身内の恥を晒すな…。失礼したミセス・シュヴルーズ、中断させた俺が言うのも何だが、授業を始めて欲しい」

それを聞いて、彼女は笑顔？で授業を始めた。

「では授業を始めます」

ようやく授業が始まる。

エミヤは魔術師上がりの英霊なため、異世界の神秘の象徴たる魔法というものがどのようなモノか知ることができるため、この授業は楽しみなようだ。

「私の二つ名は“赤土”…。赤土のシュヴルーズです。これから一年間、皆さんには“土”系統の講義をします。ミスタ・マリコルヌ、魔法の四大系統はご存知ですよね？」

「はい。ミセス・シュヴルーズ。“火”“水”“土”“風”です」

シュヴルーズは正解だと笑顔で頷く。

なるほど四つの系統か…。

ルイズのゼロという二つ名である“ゼロ”はどの系統から由来しているのだろうか。

エミヤは納得しながら、ルイズの系統について考えていた。

「そうですね、今は失われた“虚無”を合わせ五つの系統があることは皆さんも知っての通りです。身贖いではないのですが、私はこの四つの系統の中で土は最も重要な位置にあると考えています。

土系統の魔法は万物の組成を司り、この魔法のおかげで私たちは

重要な金属を作り出し、加工できているのです」

それは、俺も同感だ。

人力だけでは、どうにも出来ないことがある。

例えば、建築物だ。

巨大なものになれば成程、建物の完成に時間がかかる。

その短縮に土系統の魔法は役に立つ。

さらには巨大な岩盤をそのまま削りだし、家の形にすることもできる。

「もし、土の魔法がなければ大きな石から建物を作り出すこともできませんし、農作物の収穫も今よりもっと手間のかかる仕事になっていたでしょう。このように土系統の魔法のおかげで今の生活を送ることができているわけです」

その考えはミセスも同様のようである。

エミヤはというと、自分の世界との差に改めて驚きを感じていた。

ふむ…、成程。

この世界では科学の代わりに魔法が使われているのか…。

そのために魔法が一般化され、魔法使いがいなければ今のような生活を送ることが出来ないから、魔法使いの中に必要以上に威張る者が出てきてしまう訳か。

正にここがメイジの厄介なところである。

そもそも、メイジ…貴族が生活出来ているのは彼らが平民と呼んでいる人々からの税でいけるのだ。

勘違いしてはいけない、彼等がいなければ貴族は貴族では無くなるということ…。

「今から皆さんには土系統の基本である、錬金の魔法を覚えてもらいます。一年生のときに覚えてしまった人もいると思いますが、基本は大事ですので…」

魔術の基本が錬金だと？

エミヤは驚いていた…。

だが、直ぐに理解した…これは魔術ではなく魔法なのだ。

恐らくは、アトラス院の錬金術の研究は、別物なのだろう…。

そして、現代錬金術のことを言っているのだろう…。

そして、ソレは正解であった。

シヴルーズが教卓の上にある石に向かって魔法を唱えると、石ころは光りだしピカピカ光る金属に変わっていた。

あれは…真鍮か？

あの長さの呪文で石を真鍮に変えられるのか。

エミヤはエミヤで驚いていたが、クーもまた驚いていた。

「なんつう、デタラメな魔術だ…」

知らず嘆息に近い声を漏らしていた。

オドのみを用いて、あんな短い詠唱で物質変換を行うなど、彼らの世界ではありえなかった。

魔術の常識を逸脱している。

四系統というのは、思ったより厄介な魔術形式なのかもしれない。

「（仮にも魔法を名乗るくらいはあったってことか…）」

彼もまた生前、師の下で魔術を習っていた時期がある。彼が使えるのはルーン魔術位なので、それ程魔術を十全に理解しているというわけではないが、それでもこの世界の魔術に驚きを感じていた。

「ゴ、ゴールドですか？ ミセス・シュヴルーズ」

キュルケが言葉を詰まらせながら言う。

彼女の系統は、確か“火”だったかな…。

彼女の使い魔であるサラマンダーを見ながら、エミヤはそんなことを考える。

解析はできないみたいだな。

どうやら、この世界の魔術は解析が無いのだろうか？

私たちの世界の魔術の基本は物質の構造を理解するということが第一にくる。

自身の魔術回路の状態を確認する時がそうだ。

どうやら、魔力を使っているという点を除けば、先程の詠唱もそうだが、形態が大分変わるようだ。

「違いますよ、コレはただの真鍮です。ゴールドを錬金できるのは“スクウエア”クラスのメイジだけです。私はただの“トライアングル”ですから」

これまでの話を聞いていて疑問に思ったことがある。

「元…聞きたいことがあるのだが」

元はめんどくさそうに答える。

何故、俺に聞くんだらうか…。

ルイズに聞けば良いのになんて思ったが、ルイズを見ると未だに固まったままである。

……。

「なんだ？」

「いや、“スクウェア”や“トライアングル”という言葉がわからなくてな。教えてほしいんだが」

「それは系統を足した数のことだ。それでメイジとしてのレベルが決まるんだ。例えば土系統の魔法はそれ単体でも使えるが、そこに水系統の魔法を足せばさらに強力なモノになる…、更に火系統の魔法も使用可能となる。そして、四つ足したものが“スクウェア”、三つ足したものが“トライアングル”、二つ足したものを“ライン”、一つの系統のみを“ドット”という」

「ちょっと、待ってくれねえか」

気になっていたのは、クーの同じのようだ。

「例えば、火と火みてえに同じ系統を足すことは出来るのか？」

「もちろん可能だ。クーが言うように火と火の二つを持つメイジもラインメイジという。そして、同じ系統を複数を持っていればより強力な魔法の行使が可能となる」

「なるほどねえ…。じゃあ、あそこで講義をしている女はそれなりに強力な魔法使ってわけか」

「そういう事だな…」

俺たちが話をしていると、シュヴルーズに咎められた。

「授業中の私語はお控え願いますか？」

「っと、申し訳ありませんミス」

「聞くところ、貴方は随分と魔法の知識があるようですね？」

仮にも魔法使いだからな。

「それくらい豊富な知識をもつ使い魔を召喚したミス・ヴァリエールにやって貰いましょうか」

「……」

どうやら、シュヴルーズ女史はそれなりに怒っているようだ。

先ほど騒ぎを起こし、今また私語をしているのだから、当然だろう。彼女は使い魔の責任は主の責任だと言っているのだ。

しかし、ルイズは未だに固まっているままである。

仕方ないので、俺はルイズのおデコに一発強力なデコピンを食らわす。

「…んうっうっうー!!」

まるで何かが爆発したような音がした。

その音を聞いて、今までマイペースを貫き通していた水色髪の少女もビクッと反応した。

「な、何があったの!？」

「ルイズ、君は気を失ってたんだ」

「え、どどうして!?!」

「授業中にいきなり、目を見開いたまま気を失ったんだ。理由はわからん。それで、ミセス・シュヴルーズに呼ばれているぞ?」

「「「「「(ひ...)」」」」」

「そうなの? なんか、授業が始まってからの記憶が無いんだけど…でも起こしてくれて有難う」

「どうやら、ルイズはあまりのショックで先程の騒ぎの記憶を消してしまっただけらしい。」

「いやいや、礼を受けるほどのことはしてない」

「「「「「(ヒドイ!)(ヒデエ!)」」」」」

「そうですよ、ミス・ヴァリエール。ここにある石をあなたが望む金属に変えてごらん下さい」

「「「「「(スルー!?!?)」」」」」

シュヴルーズは元の酷い行動をスルーし、ルイズに錬金を行うように促した。

今の今まで目を開けながら気を失っていたため、何で名指しされたのか解らないルイズは突然のことに焦っているのか、立ち上がりずもジモジしている。

「ルイズ、どうした？ 先生からのご指名のようだぞ？」

「そうだけ、俺たちは今まで嬢ちゃんに魔法を使っている姿を見ていないからな」

「ミス・ヴァリエール、どうしたのですか？ はやくなさい」

エミヤとクー、シュヴルーズが促す。

それでルイズは動こうとしない。

恐らくは、使いたくても使えないのだろう…。

本当に彼女が虚無の担い手ならばな…。

そんなときにキュルケが困ったような怯えたような声で言う。

「先生…。その、やめといたほうがいいと思います」

「どうしてですか？」

「あのですね…。ルイズに魔法を使わせるのは危険です」

キュルケの声に教室にいた生徒たちが一斉に頷く。

恐らく、食堂のような爆発が起きるのだろう…。

しかし、シュヴルーズはそのことを知らないのか…。

「錬金することの何が危険のですか？ 彼女はとても努力家であると聞いていますよ。ミス・ヴァリエール、失敗を恐れては何事も始まりません。周りの人たちのことなんか気にせず、頑張ってみなさい」

「ルイズ、お願いだからやめて」

シュヴルーズ女史の言っていることは、教職者として実に立派ではある。殆どの人間は何かを始める際、最初は必ずと言って良いほど失敗する。

女史の言うとおり、失敗しても何ら恥じることはないのだ。失敗は成功の母と言う位なのだから、失敗を恐る必要はない。

しかし、キュルケは蒼白になりながらも言う。

その気持ちはわからなくはない。食堂の爆発を見る限り、下手をすれば怪我では済まないものだからだ。

しかし、肝心のルイズはというとキュルケに言われて意地を張っているのだろうか、立ち上がり教壇に向かう。

その表情は緊張で強ばっているが、そんなルイズにシュヴルーズ女史は笑顔で語りかける。

「いいですか…ミス・ヴァリエール。　錬金したい金属を強く思い浮かべてくださいね」

ルイズは少し、苛立っていた。

魔法の実践の授業となると、いつもならヤジが飛んで来るのだが、先程のマリコルヌの一件で、みんな黙り込んでしまっている。

唯一キュルケがミセス・シュヴルーズに中止を求めていたくらいで終わった。

既に先生と使い魔、ハジメ以外の皆が机の下に隠れている。

キュルケの友達の…タバサだっけ？は無言で教室を出て行った。

馬鹿にするにも程がある！

ルイズは緊張と苛立ちを覚えながらも、シュヴルーズ素直に頷き呪文を唱え始める。

元は魔眼を発動し、彼女の周りを見る。

マナが彼女の体内に取り込まれ杖に集まっていく。

エミヤとクーモルイズに注目している。

シュヴルーズが魔法を使ったときも思ったが、魔術の形態が丸つきり変わっている訳では無いらしい。

基本的なことは変わらず、魔術回路が杖に変わったと考えればいいのか。

ただ、魔術よりも色々とデタラメなだけなのである。

エミヤは魔術師として半人前、クーは魔術を専門に学んだ訳ではない。

だからこそ、その程度で感覚で納得してしまった訳だが…。

元もまた神秘を目的としてではなく、手段として学んでいたのだが、仮にも世界に6人しかない魔法使いなのだ。

彼が最初、この世界に来たときはかなり頭を悩ませた。

そんな各々考えとは別に生徒たちは既に机の下に隠れている。

エミヤとクーは錬金の魔術とはそんなに警戒しなくてはいけないものか？と怪訝な表情をする。

何故なら、魔術にしても魔法にしても失敗すれば、使われた魔力は形を成さずに霧散化するだけだからだ。

だから、2人は何をするわけでもなく、ただ見ていた。

元？

何気なく、安全な場所に退避してましたよ。

ルイズは呪文を唱え終えたのか、杖を石に向けて振り下ろした。

「「な…！」」

瞬間

辺りは光に包まれた。

何故だか解らないがルイズの魔法は爆発を起こした。

それも使われた魔力に対してかなりの威力と規模の爆発である。

シュヴルーズは気絶し、教卓はボロボロ、壁の一部にはヒビが入っている。

エミヤとクーはかなり驚いているのか、口をパクパクしている。

そして、魔法を放った張本人のルイズは服の所々が焦げて、髪汚れている。

周りの人間はルイズの失態に罵詈雑言を投げかけているが…。

当の本人は、

「ちよっと…、失敗しちゃったみたいね」

などと言っており、それを聞いた生徒達は更にヒートアップしだした。

そして、教室にはルイズと2人の使い魔、そして元だけが残された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4108y/>

ゼロの使い魔advance

2011年11月23日23時47分発行